館林市埋蔵文化財発掘調査報告書　第４集

館林市大字羽附字大袋

大袋Ⅰ遺跡発掘調査報告書

OHOBUKURO

1982

館林市教育委員会

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書　第４集

館林市大字羽附字大袋

大袋Ⅰ遺跡発掘調査報告書

OHOBUKURO

1982

館林市教育委員会

序

館林市教育委員会
教育長　福田郁司

大袋工遺跡の発掘調査が終了いたしました。

この調査は、館林市のシンボルとして名高い「つつじの名所」、県立つつじヶ岡公園の拡張、整備にともない実施されたものです。

沼に面した、この小高い「つつじヶ岡」には、かつて縄文時代の世から人々が住み、大地に働きかけをしてきたことが、先の大袋Ⅱ遺跡の発掘調査でも証明されています。

春ともなると、「６００年」を超すつつじの大樹は、全山を炎につつみます。

青い空と緑の葉、紅の織りなしを写した沼の景色は、水と緑を基調とする郷土の美しさを表わしていると言っても過言ではありません。郷土の作家「田山花袋」も、この風景を、こよなく愛し数々の作品に表わしています。

今回の調査では、この「つつじヶ岡」誕生以前の沼辺の古代を明らかにしてくれました。

中世の〝館趾〟を思わせる大規模な「濠」や、沼辺に住む人々の知恵を見せつけるかのような「炭焼窯跡」など、生活の場であったことを裏付ける数々の資料が発掘されました。

こうした発掘成果は、マスコミを賑わせる「特殊」な資料でなく、地域に生きた私達の祖先の積み重ねの証しでしかありません。しかしながら、こうした平凡な資料の単純な積み重ねのなかに地域の歴史があることを考えるとき、大きな成果を遂げたと言えるはずです。

時代の中で「つつじヶ岡」が〝安らぎの公園〟として開かれようとしている今、新たな目でこの沼辺の岡を見ることにもなるはずです。

調査にあたり、格段の配慮を賜わりました、群馬県都市公園事務所の深いご理解と、ご協力に感謝申しあげるとともに、身をもって調査にあたられた、担当者および作業員の皆様に敬意を表します。

昭和５７年６月３０日

例　　言

1. 本書は、館林市大字羽附字大袋地内に所在する大袋Ⅰ遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査は、県立つつじが岡公園建設工事に伴う緊急発掘調査である。
3. 本発掘調査の原因者は、群馬県（主管、都市公園事務所）であり、調査は館林教育委員会が委託を受け実施したもので、その組織は次の通りである。

   教育長　　福田郁司

   教育次長　河内隼一

   事務局　（館林市教育委員会　文化振興課　文化財保護係）

   課長　　鎌田正弘

   係長　　橋本賢一

   主査　　三田正信

   社教主事　落合敏男　（57年4月より）

   学芸員　　岡屋英治（担当）・新藤紀子

   調査補助員　斉藤景子

   調査作業員（調査・整理）　児玉隆司・飯塚テウ・片山クニ・相沢正子・越沢かつ・市川与志松・切海薫・青山朗・中里昇・泉田登美子・森田貞雄・武藤けい子・橋本博行・星松宏・吉丸嘉明・坂田雅美・斉藤登美枝・川口和子・島田とも子・田代幸枝・岡田光二・渡辺征美・葭葉たか・葭葉嘉亮・谷きう・斉藤カネ・坂村フジ・越谷長男・恩田英男・寺田国男・後閑高広・船田清・
4. 調査期間は、56年12月～57年6月まで行った。
5. 調査に伴う諸経費は、群馬県委託の10,800,000円である。
6. 本報告書の図面作成・トレースは、岡屋・斉藤・川口・島田が行い、写真撮影・文章・編集は、三田・岡屋・新藤・斉藤が行った。
7. 本報告書中、ローム、攪乱、焼土等にはトーンを使用した。
8. 調査から、報告書刊行にあたり、下記の方々、諸機関に、御指導、御教示、御協力いただいた。記して感謝いたします。（敬称略・順不同）

   山崎一・新井房夫・沢口宏・田村吉久・森田秀策・井上唯雄・松本浩一・能登健・小島敦子・県文化財保護課・館林高校社会研究部・館林女子高校社会研究部。

目　　次

序

例　言

目　次 …… 5

挿図目次 …… 6

図版目次 …… 7

第１章　調査に至る経過 …… 9

第２章　遺跡の位置と環境 …… 10

　第１節　地理的環境 …… 10

　第２節　歴史的環境 …… 12

第３章　調査の方法と経過 …… 13

第４章　層位状況 …… 19

第５章　遺構と遺物 …… 21

　第１節　第１号溝址 …… 21

　第２節　第２号溝址 …… 29

　第３節　炭焼窯址 …… 31

　第４節　土　　坑 …… 33

第６章　出土遺物 …… 35

　第１節　先土器時代 …… 35

　第２節　縄文時代 …… 40

　第３節　弥生時代 …… 52

第７章　調査の成果と問題点 …… 53

参考文献 …… 56

写真図版 …… 57

挿　図　目　次

第 1 図　周辺の遺跡 …… 11
第 2 図　全体図（先土器時代、遺物分布図） …… 15・16
第 3 図　全体図（縄文時代以降、遺構、遺物分布図） …… 17・18
第 4 図　土層柱状図 …… 19
第 5 図　第1号溝址平面図及び断面図 …… 21
第 6 図　第1号溝址出土遺物実測図(1) …… 22
第 7 図　第1号溝址出土遺物実測図及び拓影(2) …… 23
第 8 図　第1号溝址出土遺物実測図及び拓影(3) …… 25
第 9 図　第1号溝址出土遺物実測図及び拓影(4) …… 26
第10図　第2号溝址平面図及び断面図 …… 29
第11図　炭焼窯址平面図及び断面図 …… 31
第12図　第1・2・3・4号土坑平面図及び断面図 …… 33
第13図　先土器時代石器実測図(1) …… 36
第14図　先土器時代石器実測図(2) …… 37
第15図　先土器時代石器実測図(3) …… 38
第16図　縄文時代遺物実測図 …… 40
第17図　縄文時代土器群拓影(1) …… 41
第18図　縄文時代土器群拓影(2) …… 43
第19図　縄文時代土器群拓影(3) …… 45
第20図　縄文時代土器群拓影(4) …… 47
第21図　縄文時代土器群拓影(5) …… 48
第22図　縄文時代石器群実測図(1) …… 50
第23図　縄文時代石器群実測図(2) …… 51
第24図　弥生時代土器実測図 …… 52

図　版　目　次

写真 1　遺跡遠景 …… 図版 1
写真 2　遺跡近景 …… 図版 1
写真 3　調査風景 …… 図版 2
写真 4　調査風景 …… 図版 2
写真 5　第一号溝址（東側） …… 図版 3
写真 6　第一号溝址（西側） …… 図版 3
写真 7　第一号溝址土層断面 …… 図版 4
写真 8　第一号溝址土層断面 …… 図版 4
写真 9　第一号溝址出土遺物 …… 図版 5
写真10　第一号溝址出土遺物 …… 図版 5
写真11　第一号溝址出土遺物 …… 図版 6
写真12　第一号溝址出土遺物 …… 図版 6
写真13　第二号溝址 …… 図版 7
写真14　第二号溝址土層断面 …… 図版 7
写真15　第二号溝址土層断面 …… 図版 7
写真16　炭焼窯址 …… 図版 8
写真17　炭焼窯址土層断面 …… 図版 8
写真18　第一号土坑 …… 図版 9
写真19　第二号土坑 …… 図版 9
写真20　第三号土坑 …… 図版 9
写真21　第四号土坑 …… 図版 9
写真22　先土器時代石器群 …… 図版10
写真23　先土器時代石器群 …… 図版10
写真24　先土器時代石器群 …… 図版11
写真25　縄文時代土器群 …… 図版11
写真26　縄文時代土器群（拓影） …… 図版12
写真27　縄文時代土器群（拓影） …… 図版12
写真28　縄文時代土器群（拓影） …… 図版13

写真29　縄文時代土器群（拓影）……図版13
写真30　縄文時代土器群（拓影）……図版14
写真31　縄文時代石器群……図版14
写真32　縄文時代石器群……図版15
写真33　弥生時代土器群……図版15

第１章　調査に至る経過

館林市に所在する県立つつじが岡公園は、国の名勝として、文化財であるとともに、館林市の重要な観光資源である。

昭和55年、同公園を、四季型の公園として拡張、整備する計画が出され、同計画内に、大袋Ⅰ遺跡が含まれていることから、同遺跡の取りあつかいについて館林市教育委員会では、主管課である群馬県都市公園事務所及び、県教育委員会文化財保護課と協議を開始した。

大袋Ⅰ遺跡は、県立つつじが岡公園の東南面に位置する縄文時代の早期から前期の遺物を出す遺跡である。

当教育委員会では、同遺跡の保存や、工事計画の変更について、県教育委員会、都市公園事務所と協議を重ねるとともに、同遺跡の範囲や、状況について踏査や、坪掘り等を実施した。

しかしながら、同計画が、公園の機能や活用等の面から考えれば、妥当なものであるとともに、城沼周辺の整備事業の一環として計画されたものであるため、やむをえない開発行為としてとらえることができ、事前に発掘調査を実施し、記録保存を図る方向で対処することとした。

以下経過を簡単にまとめると、

昭和55年10月　つつじが岡公園の整備、拡張計画に伴う埋蔵文化財包蔵地の保護について、県教育委員会文化財保護課、群馬県都市公園事務所と協議開始。

昭和56年４月　群馬県都市公園事務所より、同遺跡の発掘調査の依頼を受ける。
現地踏査実施。

昭和56年６月　上記理由をふまえ、記録保存の方向で検討。
踏査実施、調査区域、調査計画について検討する。

昭和56年７月　工事計画書を検討、調査計画について再検討、協議実施。

昭和56年８月　調査仕様について協議、掘削深度等確認の為坪掘り等を行う。

昭和56年９月　11月を目途として調査に入る旨、協議。

昭和56年11月　調査の為の準備

昭和56年12月　調査開始。

尚、当初昭和57年３月に調査を終了する予定で、調査を実施したものの、調査進行につれ、新事実発見等があり、その期間を昭和57年６月までとした。

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

館林市は、群馬県の東端に位置する低台地と湿地からなる地域である。標高は、最高のところで30ｍ、低いところで16ｍと、比較的凹凸の少ない平坦な地域である。

低台地と湿地は、明確に分けられ、その境界は２～３ｍ前後の比高差がみられる。

本市の台地は、「邑楽・館林台地」と呼ばれ、標高30～20ｍの台地で、砂や粘土の地層の上に、中部ローム層と上部ローム層をのせている。この台地の地層の堆積時は、下末吉海進の時期といわれ、前橋や藤岡の台地より古いものである。

台地の上には、大泉町篠塚から館林市高根まで連なる砂丘帯がある。これは、日本最古の内陸古砂丘といわれ、地元では、「鞍掛山脈」と呼んでいる。
古利根川によって造られた自然堤防が、その元型といわれ、その形成時期は、下末吉海進時と考えられている。

これらの低台地をとり囲むように、湿地帯が存在する。湿地帯は、台地北側が、渡良瀬川、南側は、利根川の湿地帯である。この湿地帯の中に、旧河川の流路が確認され、その周辺には自然堤防が発達する。

本市周辺を流れる河川は、北に渡良瀬川、南に、利根川の両大河、邑楽台地南辺下を谷田川が、台地の中央部を鶴生田川があり、東流し現況を作り出している。

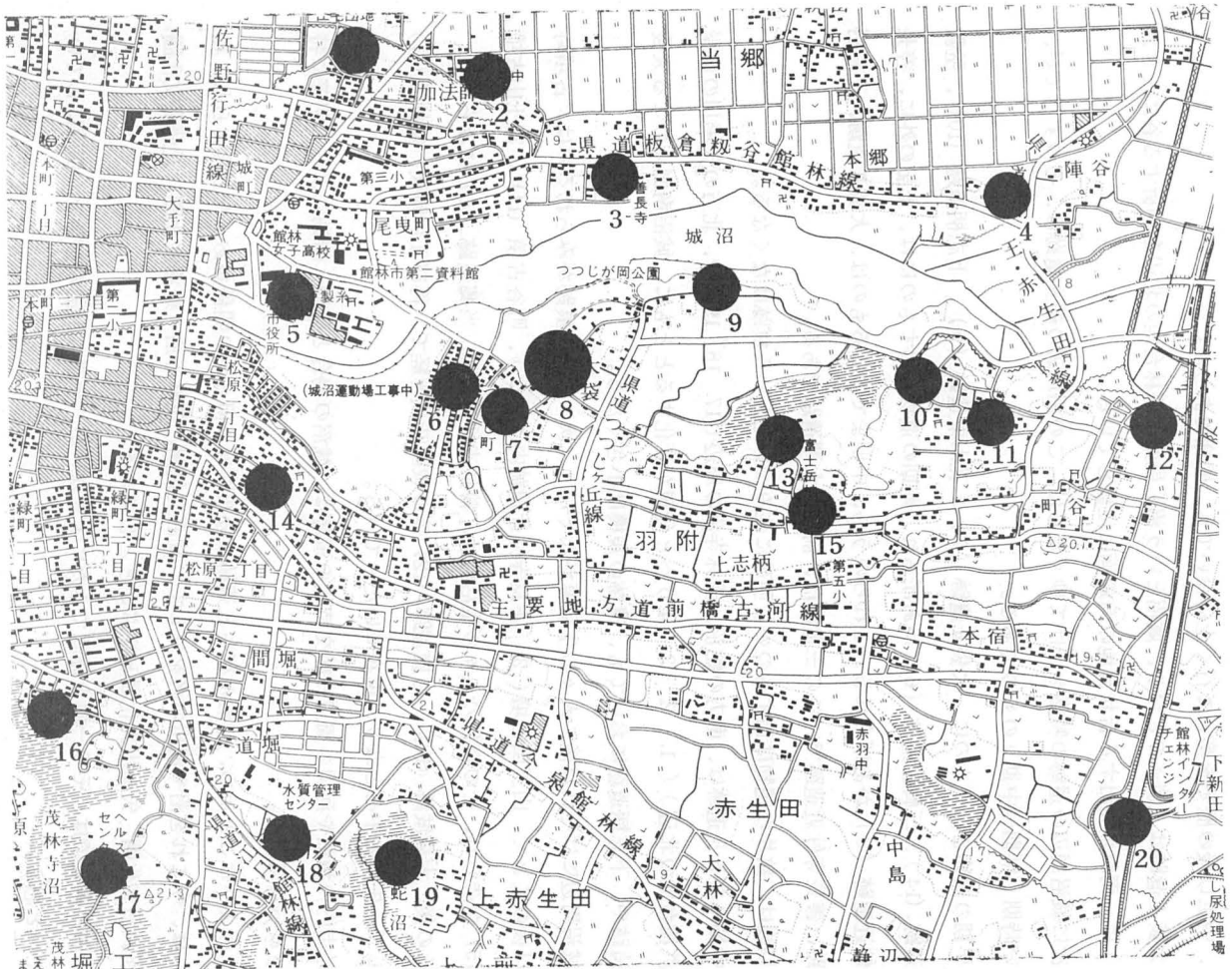
又、この他に湿地帯には、多々良沼、城沼、近藤沼、茂林寺沼をはじめとする多くの池沼や谷地が存在する。これらの沼は、台地の水を集めて形成されたと考えられてはいるが、明確な根拠はない。最近では、邑楽地域の河川や池沼群を水系と通して考えなおそうとされている。

大袋Ⅰ遺跡は、東部伊勢崎線館林駅の東方約２Kmのところにあり、その地番は、群馬県館林市大字羽附字大袋3128－1，2，3，4，5，3129－1，2，3，4，5，6，7，8，9，10，11で、面積は、13,759㎡である。

前述の邑楽・館林台地の北辺、城沼に突出した舌状台地の北斜面に位置する遺跡で、一昨年度調査を実施した「大袋Ⅱ遺跡」と、谷を１つへだてた台地上にある。

城沼は、邑楽・館林台地の北辺を、大きく開析する鶴生田川の水を集めた沼であり、沼の周辺部には、本遺跡と同じ時期の遺跡が多く存在する。

縄文時代前期には、城沼をとりまいて、一つの文化圏が、存在したのであろう。



1. 加法師遺跡
2. 外加法師遺跡
3. 善長寺付近遺跡
4. 当郷遺跡
5. 館林城跡
6. 三軒屋遺跡
7. 大袋Ⅱ遺跡
8. 大袋Ⅰ遺跡
9. 花山東遺跡
10. 下志柄遺跡
11. 町谷古墳
12. 白旗城跡
13. 大袋城跡
14. 屋敷添遺跡
15. 富士山古墳
16. 腰巻遺跡
17. 下堀工道満遺跡
18. 大原道東遺跡
19. 間堀遺跡
20. 道満遺跡

0　1.25㎞

第１図　周辺の遺跡

第２節　歴史的環境（城沼を中心として）

本市館林における遺跡の分布と地形的要素を考えていくならば、市内に存在する遺跡の大半が、縄文時代の遺跡であり、それらがすべて、館林・邑楽地方特有の池沼や、河川周辺の台地上の存在するという特徴が上げられる。

館林の古代遺跡を考えていく上で、水とのかかわりは、切っても切れないものがあり、これは、中世以後の歴史を築いて行く上においても、同様であった。

大袋Ⅰ遺跡は、前述のとおり、城沼という沼（邑楽・館林台地の北辺を開析する谷にできた沼）に、南から突出する舌状台地の西斜面に位置している。

次に城沼周辺の遺跡の特徴を上げてゆくならば、この沼周辺の縄文遺跡は、そのすべてが、古い時期（早期～中期）のものである。

早期の遺物を出すものに、大袋Ⅱ遺跡（7）、花山東遺跡（9）、下志柄遺跡（10）、屋敷添遺跡（14）、三軒屋遺跡（6）があげられ、前期の遺物を出すものには、上記の外に、善長寺付近遺跡（3）があげられる。これらのうち、中期までのこるものは、大袋Ⅱ遺跡、下志柄遺跡、善長寺付近遺跡で、この三遺跡は、前期の大型遺跡である。

以後は、数片の遺物は出すものの、明確に住みついたという痕跡はなくなる。

中期になると遺跡は、南方の蛇沼・茂林寺沼の周辺（17. 18. 19）や、北方の矢場川の南岸（洪積台地の北辺）（1. 2. 3. 4.）へと分布が変化するとともに、城沼南側にのこる大袋Ⅱ遺跡や、下志柄遺跡においても、遺跡の規模は小さくなる。

城沼周辺にはそれ以後、人々の生活痕がなくなり、次に人々の痕跡がみられるのは、古墳時代以後のことで、山王山古墳（3. 善長寺付近遺跡内にある）、町谷古墳（11）、富士山古墳（15）が造られ、その時代の人々の生活痕は、善長寺付近遺跡、当郷遺跡（4）にみられる。

その後、大袋城跡（13）、白旗城跡（12）等の戦国時代を経て、再び江戸時代、館林城（5）として、生活の中心となり、現在にいたっている。

又市内の池沼や河川の周辺の縄文時代の遺跡は、城沼の場合と同様、時期によって明確に特色づけられている。

このようなことから、池沼の存在と遺跡の分布には、何らかの関係があったと考えられ、私たちは、今これを沼や河川の名を付して、城沼文化圏，茂林寺沼・蛇沼文化圏，近藤沼文化圏，多々良沼文化圏，矢場川文化圏と呼ぶこととしている。

今回の調査では、その一端を確認できたにすぎないが、今後、上記の特徴を、明確にしていきたいと思う。

第３章　調査の方法と経過

大袋Ⅰ遺跡は、城沼に突き出した舌状台地の北西斜面に位置する。

今回の工事区域は、本遺跡の南側ほぼ３分の１の面積にあたる。掘削機による掘り下げや、盛土が工事区域全面で行なわれることから、調査は工事区域の全面を対象とすることとした。

調査の方法は、当初 一辺 10*m*のグリットを設定し、その西壁を幅２*m*で掘削するトレンチ方式を用い、遺構、遺物の検出があれば、本調査を実施する予定であった。

前述の通り、4月、6月の踏査の結果、調査区域の全面から、縄文時代前期黒浜式の土器片を採取することができ、同時期の集落を予想することができた。又、８月の坪掘りにおいて、表土（耕作土）は30*cm*前後、耕作土下は即ロームとなっていることが確認できた。

これらのことを前提に、調査区域内の工事用仮設道路の徹去が不能なこと、昨年度の「大袋Ⅱ遺跡」の調査の結果、時間的ロスをはぶくこと等を考慮し、次のとおり調査の方法を変更した。

グリットは、地形、調査区の形に即して一辺４*m*とすること。

表土剝ぎ（耕作土剝ぎ）には、掘削機を利用すること。

工事用仮設道路を残し、調査区を北と南に２分すること。

整地が済んでいる部分については、試掘をし、遺構、遺物の存在を確めること。

排土は、西側の谷へ落とすこと。

以上の方法から、グリットは、調査区の東北隅の杭（道路杭）を基準に、一辺４*m*で、東から西へ１～19列、北から南へＡ～Ｒ列の合計342を設定した。（第２・３図参照）

表土剝ぎについては、バックホーと、ブルドーザーを使用し、ロームより５*cm*程を残し、剝ぎとった。以下は、人力により、遺構と遺物の検出につとめた。

表土排除時より、所々に、遺物が検出しはじめ、遺構の所在が予想された。

以下調査日誌を参照されたい。

11月25日　調査開始にあたり、前もって表土剝ぎを実施するため、バックホー、ブルドーザーを投入、調査担当者立ちあいのもとに、表土剝ぎ開始。

12月１日　調査開始、掘削機による表土剝ぎとともに、人力による表土剝ぎ開始。

12月４日　表土剝ぎ、遺物（縄文時代前期黒浜式）が出土しはじめる。
工事用道路北側の表土剝ぎ開始。

12月９日　表土剝ぎ終了、遺物の集中する所が、数ヶ所見とめられる。

12月10日　遺構確認を開始する。
グリット設定。杭打ち開始。一辺４*m*、調査区北東隅が基準。

北風が強く、遺構確認が困難。

12月11日～26日　遺構確認。強風のため遺構確認がむづかしい。

12月27日～１月５日　年末年始休み。

１月６日～１月26日　遺構確認。プランが明確に出ないため、遺物集中箇所にトレンチを入れ、断面確認することとする。遺物の集中箇所は、B、C、Dライン。G－10、11グリット、K・2－6グリット、J・K－9、10グリットN、D－2、3、4グリット、M、N－9、10グリット、N、D－15 16グリットである。道路北側にトレンチを入れる。

１月14日～27日　H、Iラインに確認された廃道址にトレンチを入れる。6ライン、8ライン。溝状の遺構であることを確認。

１月27日～２月24日　道路南側の遺物集中箇所にトレンチを掘る。

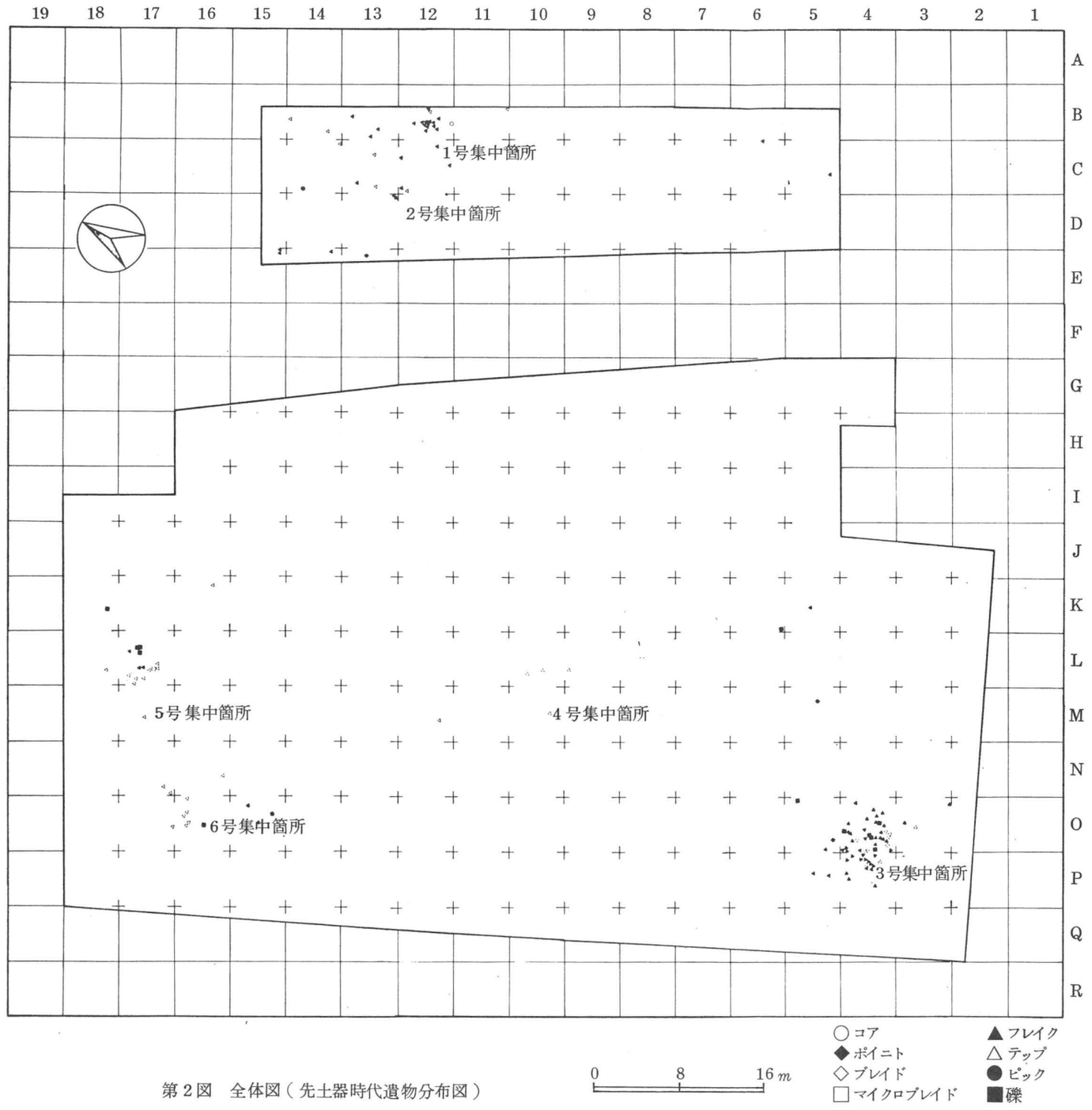
２月25日～３月31日　道路北側の掘り下げ。明確な遺構は確認されない。当初３月31日までの調査期間を６月まで延長することを決定。

４月１日～28日　道路北側掘り下げ、１号土坑、２号溝調査。

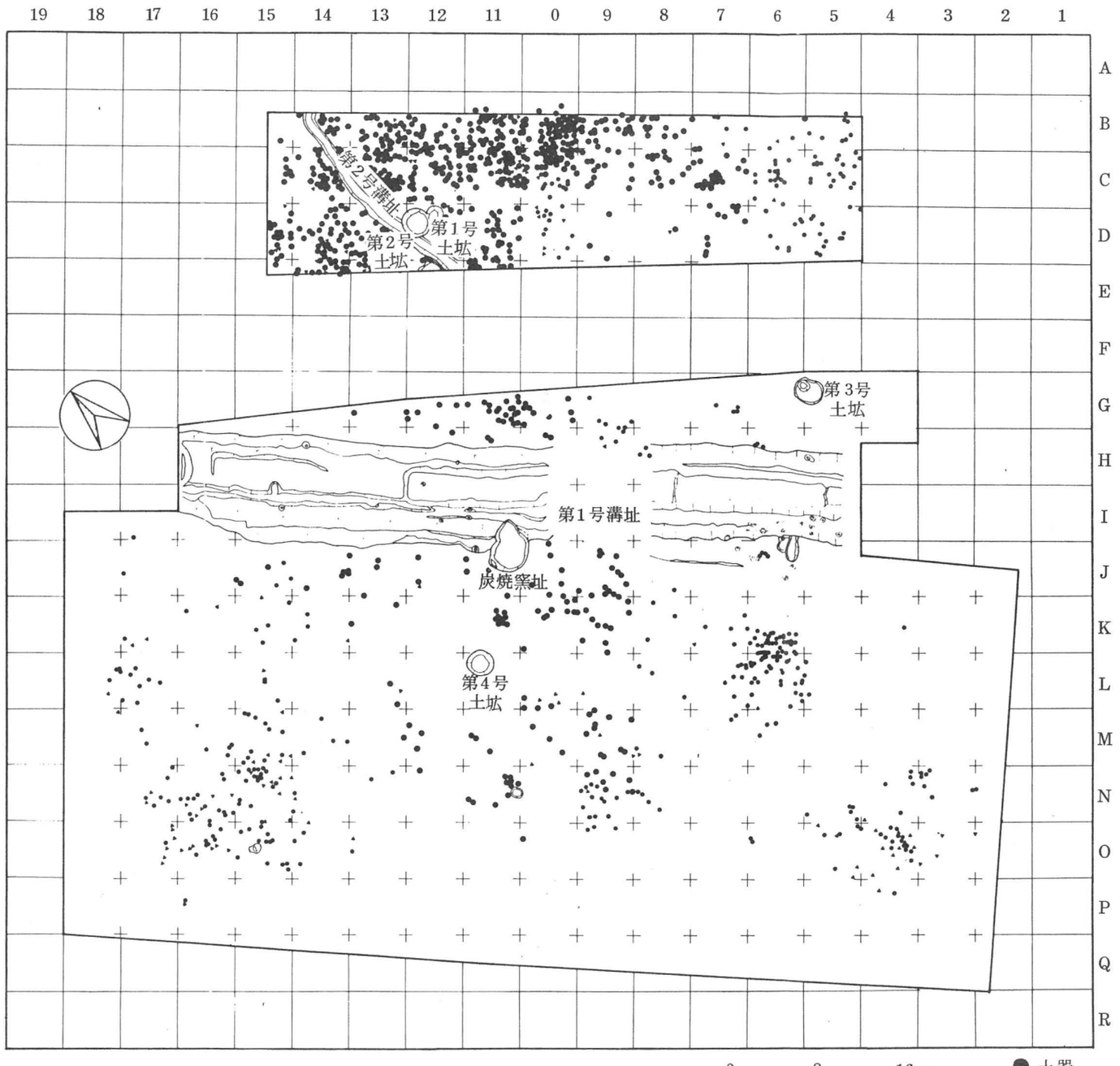
４月29日～６月26日　道路南側調査。遺物集中箇所の掘り下げ。１号溝址、炭焼窯、土坑調査。図面等作成。

６月27日～29日　図面等作成。あとかたづけ。

６月30日　調査終了。

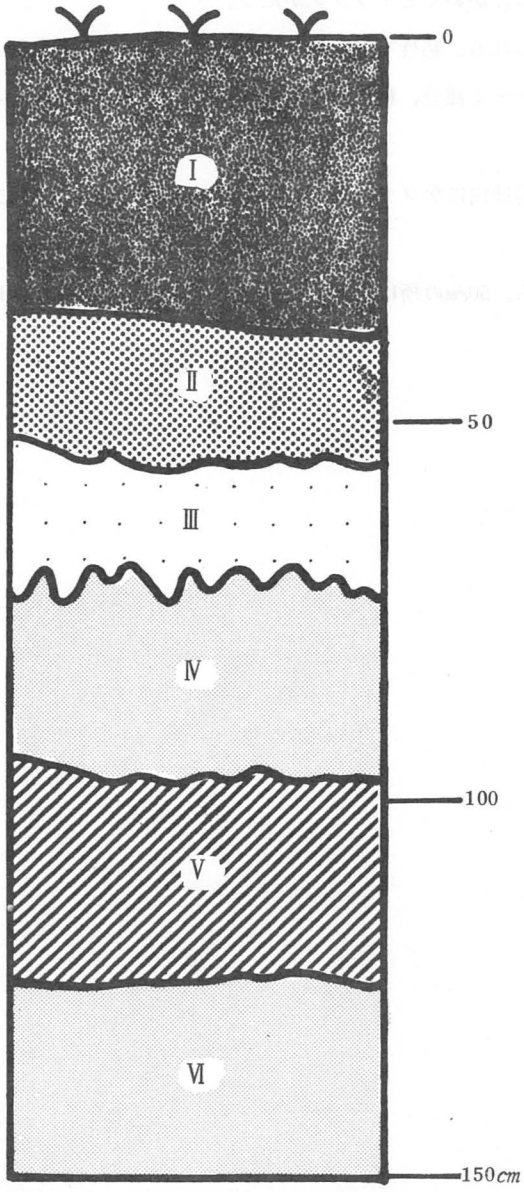


第２図　全体図（先土器時代遺物分布図）



第3図　全体図（縄文時代以降、遺構、遺物分布図）

第４章　土　層　状　況



第４図　土層柱状図

館林、邑楽地方の洪積台地は河川運搬の上に中部・上部ロームを堆積させている。

市内神戸製糸工場地内のボーリング資料によれば、表土から５ｍまでがローム層、以下は、砂、細礫、シルト、粘土の互層となっており、150ｍ以下180ｍまでは細礫になっている。

ロームは、上部・中部ロームからなり中に一枚の黒色帯が存在する。

本遺跡は、前述のとおり、城沼に向かってのびる洪積台地の上に位置しており、表土下にロームが存在している。

本遺跡をのせる洪積台地は、邑楽台地の北辺に有る舌状台地で、渡良瀬川氾濫原にのびる舌状台地のうち、最大のものである。

第４図は、本遺跡の代表土層を模式化したものである。

本遺跡では、表土は30～40cm程で、耕作等の攪乱層となっている。表土下は即漸移層へと続く。本遺跡の土層状況は、昨年度調査した大袋Ⅱ遺跡の土層状況と極似していることがわかる。

次に土層説明をすると

第Ⅰ層　褐色土層　（耕作土層　砂を含みさらさらしている。粘性、しまりなし。）

第Ⅱ層　暗黄褐色土層　（いわゆる漸移層である。粘性有り、しまりはよわい。）

第Ⅲ層　黄褐色土層　（ローム層のリフト部分。粘性有り、しまりはよわい。）

第Ⅳ層　黄褐色土層　（ローム層のハード部分、粘性有り、しまりつよい。Ⅲ層との境は、不連続面を示し、かわくとクラックがたつ。）

第Ⅴ層　暗褐色土層　（暗色帯と思われる。粘性有り、しまりつよい。スコリアを含む。）

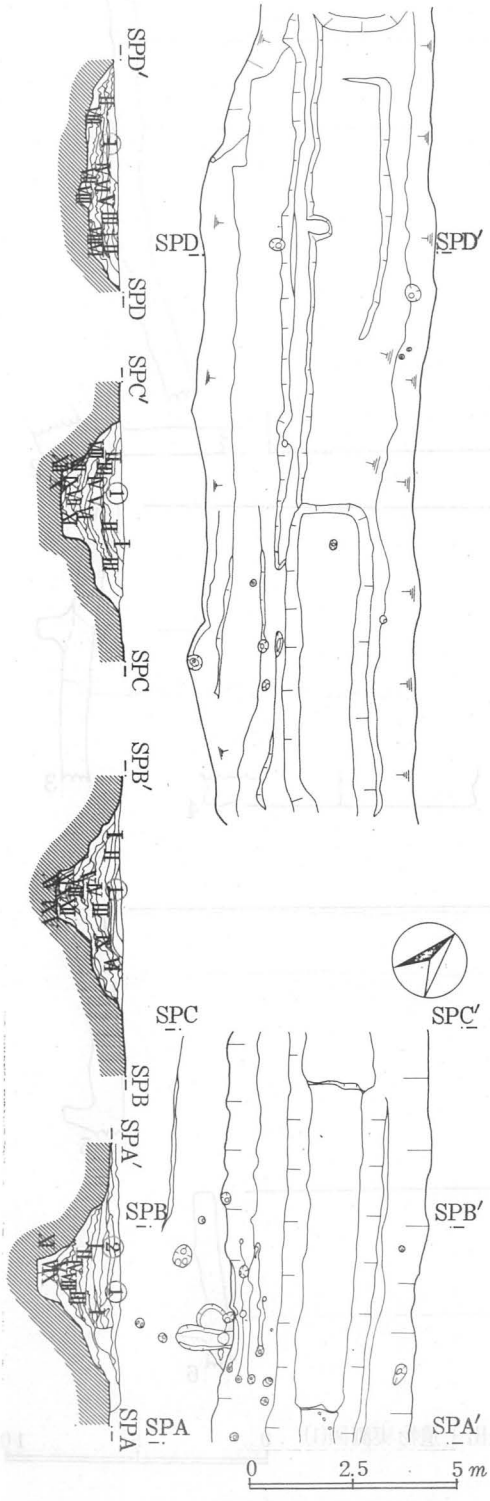
第Ⅵ層　黄褐色土層　（ローム層のハード部分、粘性強くしまりもつよい。粒子が荒い。）

以上のようである。

基本土層中には入らないが、第一号溝址内にテフラが確認されており、群馬大学新井房夫氏の鑑定によれば、浅間C軽石とされる。

この軽石は、第一号溝址の確認面から、50*cm*の所に存在し、厚さ１～３*cm*程で、一律ではないものの、遺構全体を覆っている。

第５章　遺構と遺物



第５図　第１号溝址平面図及び断面図

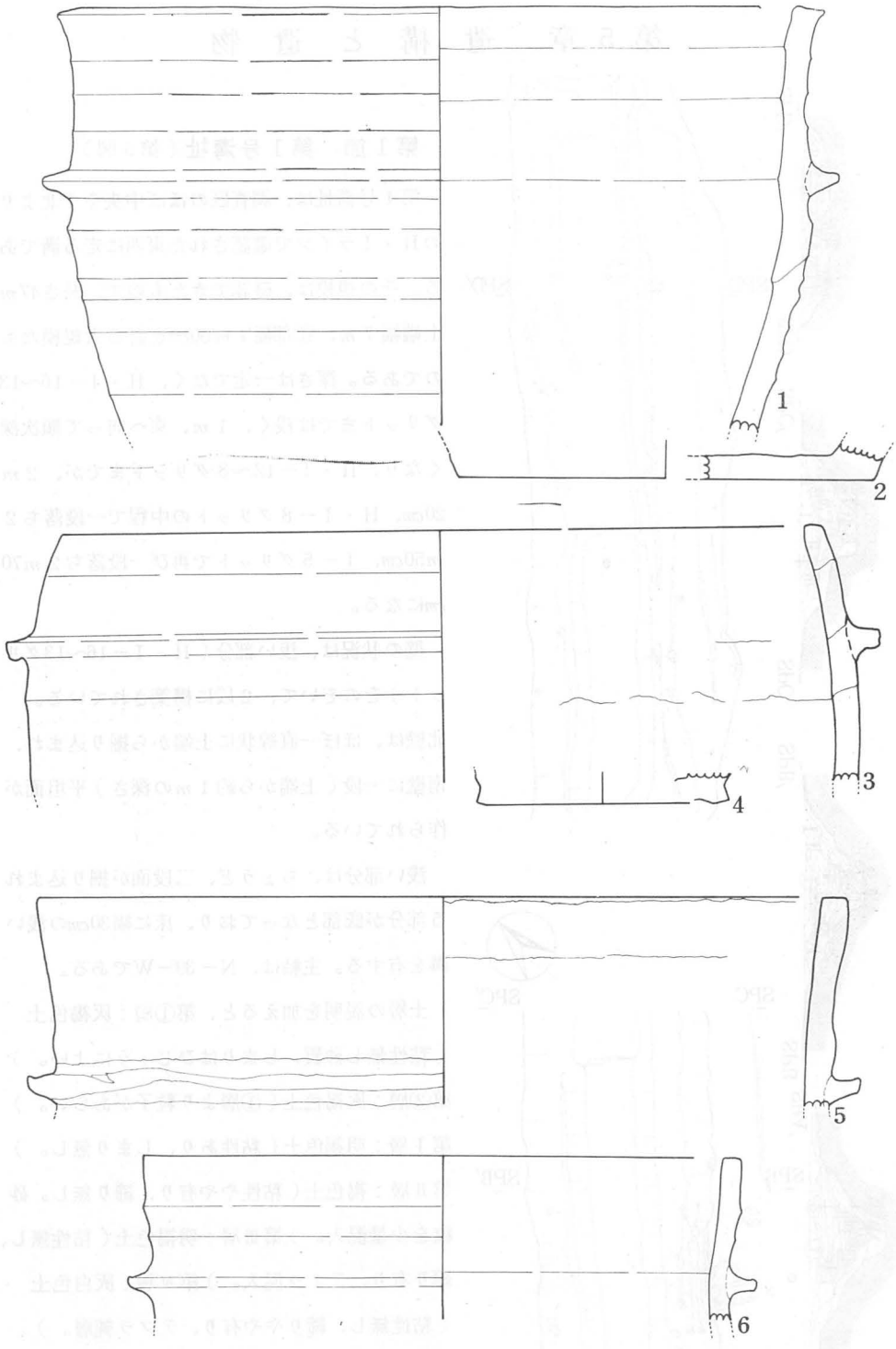
第１節　第１号溝址（第５図）

第１号溝址は、調査区のほぼ中央やや北よりのＨ・Ｉラインで確認された東西に走る溝である。その規模は、確認できたもので、長さ47*m*、上端幅７*m*、底部幅１*m*50*cm*を計る大規模なものである。深さは一定でなく、Ｈ・Ｉ－16～13グリットまでは浅く、１*m*、東へ向って順次深くなり、Ｈ・Ｉ－12～８グリットまでが、２*m*20*cm*、Ｈ・Ｉ－８グリットの中程で一段落ち２*m*50*cm*、Ｉ－５グリットで再び一段落ち２*m*70*cm*になる。

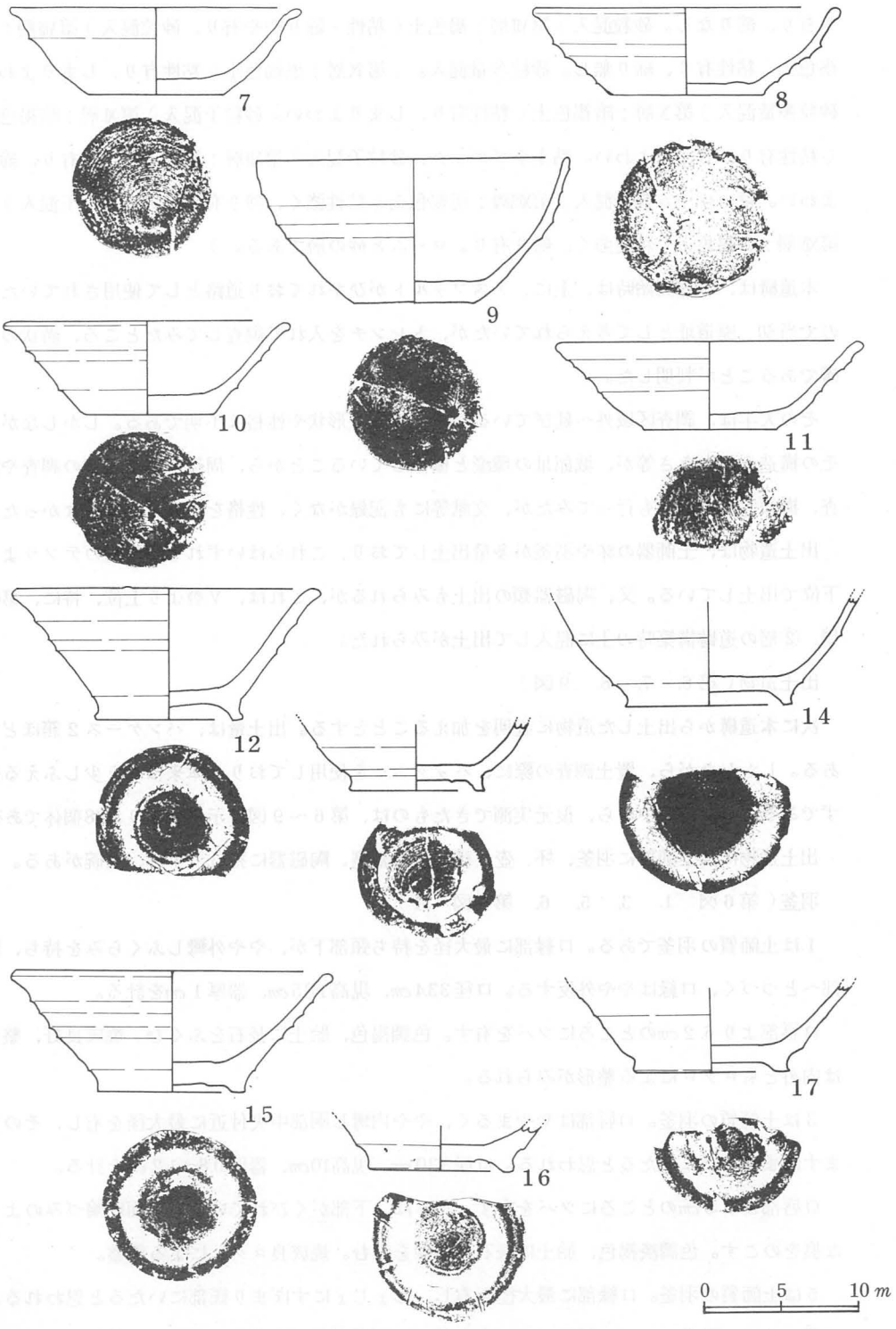
壁の状況は、浅い部分（Ｈ・Ｉ－16～13グリット）をのぞいて、２段に構築されている。北壁は、ほぼ一直線状に上端から掘り込まれ、南壁に一段（上端から約１*m*の深さ）平坦面が作られている。

浅い部分は、ちょうど、二段面が掘り込まれる部分が底部となっており、床に幅30*cm*の浅い溝を有する。主軸は、Ｎ－39°－Ｗである。

土層の説明を加えると、第①層：灰褐色土（粘性無し砂質、しまりはひじょうによい。）第②層：灰褐色土（①層より粒子があらい。）第Ⅰ層：明褐色土（粘性あり、しまり無し。）第Ⅱ層：褐色土（粘性やや有り、締り無し。砂粒を少量混入。）第Ⅲ層：明褐色土（粘性無し、締り有り、テフラ混入。）第Ⅳ層：灰白色土（粘性無し、締りやや有り、テフラ純層。）第Ⅴ層：褐色土（粘性やや有り、締り有り、粘土ブロック混入。）第Ⅵ層：暗褐色土（粘性や



第6図　第1号溝址出土遺物実測図(1)



第７図　第１号溝址出土遺物実測図及び拓影(2)

や有り、締りなし。砂粒混入）第Ⅶ層：褐色土（粘性・締りやや有り、砂粒混入）第Ⅷ層：暗褐色土（粘性有り、締り無し。砂粒多量混入。）第Ⅸ層：黒褐色土（粘性有り、しまりよわい。砂粒多量混入）第Ⅹ層：暗褐色土（粘性有り、しまりよわい。砂粒子混入）第Ⅺ層：暗褐色土（粘性有り、しまりよわい。粘土小ブロック、砂粒子混入）第Ⅻ層：褐色土（粘性有り、締りよわい。荒いローム粒子混入）第XIII層：明褐色土（粘性強く、締り有り。ローム粒子混入）第XIV層：明褐色土（粘性強く、締り有り。ロームと砂の層である。）

本遺構は、調査開始時は、上に、アスファルトがひかれており道路として使用されていたもので当初　廃道址として考えられていたが、トレンチを入れて調査してみたところ、溝状の遺構であることが判明した。

その大半は、調査区域外へ延びているため、全体の形状や性格は不明である。しかしながらその構造や、大きさ等が、城館址の環濠と極似していることから、周辺の工事区域の調査や踏査、構図等との照合も行ってみたが、文献等にも記録がなく、性格を明確にはできなかった。

出土遺物は、土師器の坏や羽釜が多量出土しており、これらはいずれも第Ⅴ層のテフラより下位で出土している。又、陶磁器類の出土もみられるが、これは、Ⅴ層より上位、特に、第①層、②層の道跡構築時の土に混入して出土がみられた。

出土遺物（第6.　7.　8.　9図）

次に本遺構から出土した遺物に説明を加えることとする。出土量は、パンケース2箱ほどである。しかしながら、覆土調査の際に、バックホーを使用しており、本来はもう少しふえるはずである。これらの中から、復元実測できたものは、第6～9図に示すとおり、48個体である。

出土遺物には土師器に羽釜、坏、壺、甕、須恵器甕、陶磁器に猪口、小鉢、茶碗がある。

羽釜（第6図　1.　3.　5.　6.　第9図　31）

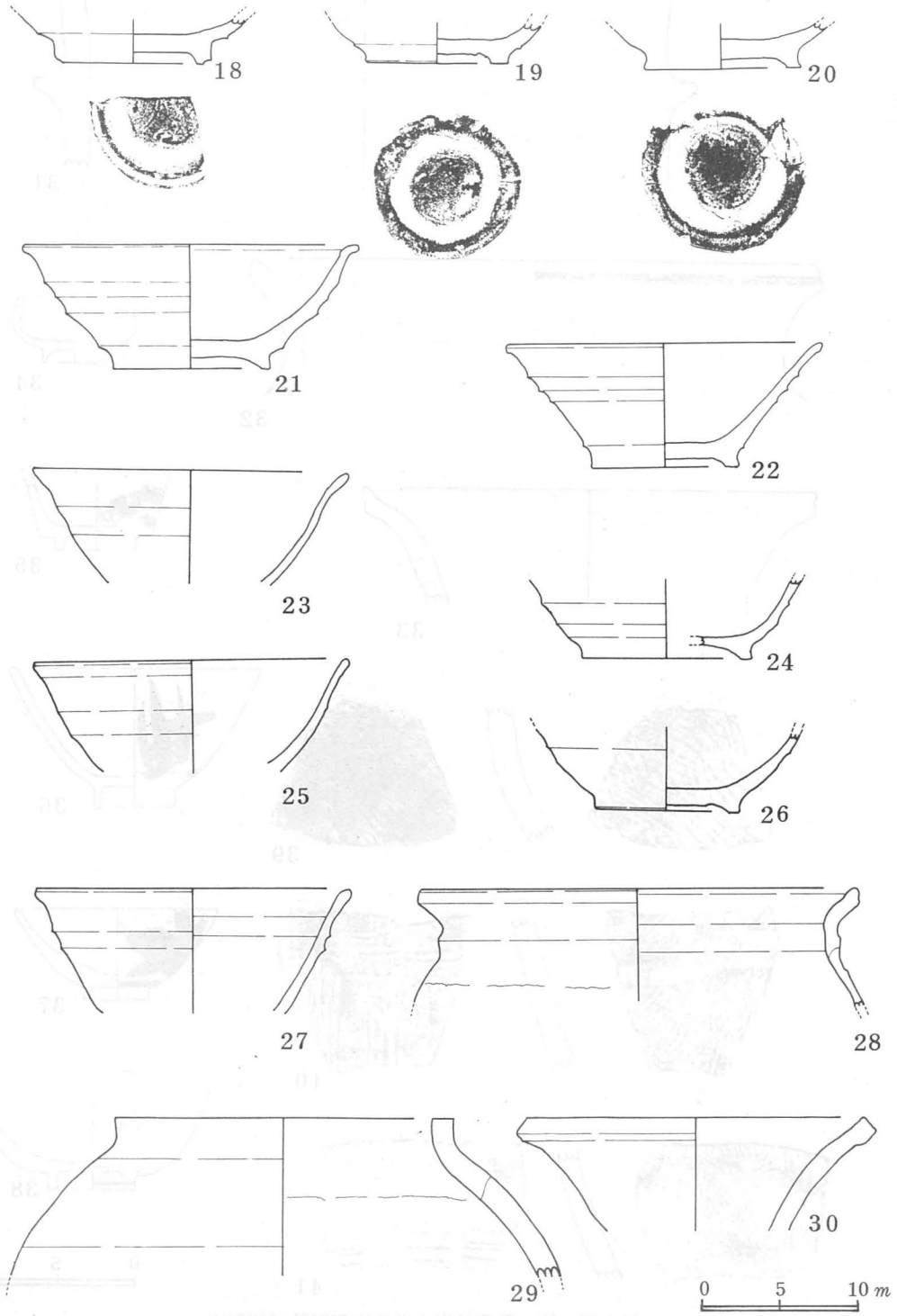
1は土師質の羽釜である。口縁部に最大径を持ち頸部下が、やや外彎しふくらみを持ち、底部へとつづく、口縁はやや外反する。口径33.4㎝、現高18.5㎝、器厚1㎝を計る。

口唇部より6.2㎝のところにツバを有す。色調褐色、胎土に長石をふくむ。焼成良好、整形は内外ともロクロによる整形がみられる。

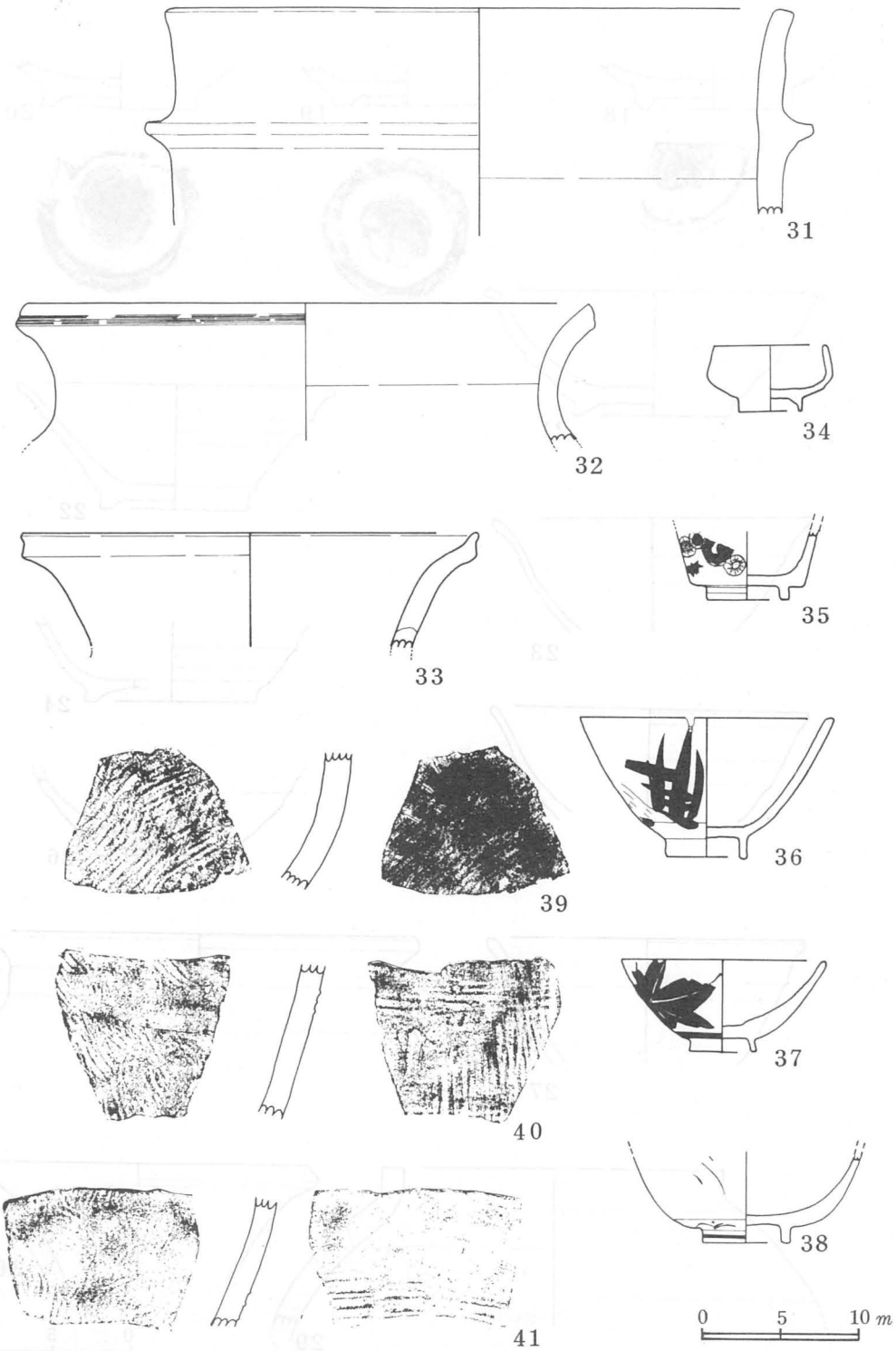
3は土師質の羽釜。口唇部はややまるく、やや内彎し胴部中央付近に最大径を有し、そのまますぼまり底部にいたると思われる。口径33.0㎝、現高10㎝、器厚0.8～1.2㎝を計る。

口唇部より5㎝のところにツバを有す。ツバは、下部がくびれている。断面に輪づみのような痕をのこす。色調淡褐色、胎土に長石、細砂を含む。焼成良ロクロによる調整。

5は土師質の羽釜。口縁部に最大径を有し、じょじょにすぼまり底部にいたると思われる。口径35.0㎝、現高9㎝、器厚1.0～1.2㎝を計る。口唇部は、角ばっており、口唇部より8㎝のところにツバを有する。ツバは上にそっている。色調褐色、胎土に長石、細砂を混入し、焼成



第８図　第１号溝址出土遺物実測図及び拓影(3)



第９図　第１号溝址出土遺物実測図及び拓影(4)

は良好であるが、そ雑な造りである。

6は土師質の小型の羽釜である。口縁部に最大径を有し、すぼまって底部にいたるものと考えられる。口径26cm、現高7cm、器厚0.8cmを計測する。口唇部は角ばっており、口唇部より、5.5cmのところにツバを有する。上部にツバを有する。色調赤褐色、胎土には長石、細砂を混入焼成は良好、ロクロでしっかり造られている。

31は、土師質の羽釜。口縁部はやや外反し、ややすぼまり、そのまま底部へと続く。

口径27.2cm、現高9.5cm、器厚1.2cmを計る。口唇部より5.1cmのところにツバを有し、やや上に反っている。色調は、表面灰色、内面は赤褐色を呈し、胎土には長石、細砂を混入する。焼成良好であるが、造りはそ雑である。

（第7図　7～17、第8図　18～27）

坏の出土数は多い。実測できたものに20個体あった。高台のつくものとそうでないものがある。坏はそのいずれもが土師質である。別表の通り一覧表に示した。

壺（第6図3.　第8図30.　第9図33）

3は、土師質の壺の底部である。底は2mm程の上げ底になっている。底径5.5cm、器厚は底部で0.8cmを計る。長石、細砂混入、焼成良好、淡褐色を呈す。

30.　33は、壺の口縁部破片。大きく外反し、頸部でくびれ、胴部でもう一度ふくらみ、底部にいたると思われる。灰色を呈し、胎土に長石、細砂を混入、焼成は良好である。

甕（第8図28.　29.　第9図32.　39.　40.　41）

28は、土師質の甕の口縁部破片。口径19.4cm、現高4cm、器厚0.4～0.8cmを測る。

29は、土師質の甕の口縁から胴部上半にかけての破片。口縁は短くまっすぐに立ち、胴部は外彎して大きくふくらむ。口径15.0cm、器厚1cmを測る。乳白色。

39～41は、須恵器甕の破片。同一個体と思われる。表に縦横の、裏に円形のたたき目がみられる。

その他、陶磁器（第6図2.　第9図34～38）

2は大型の底部破片である。土師質。底径18cmを計ると思われる。

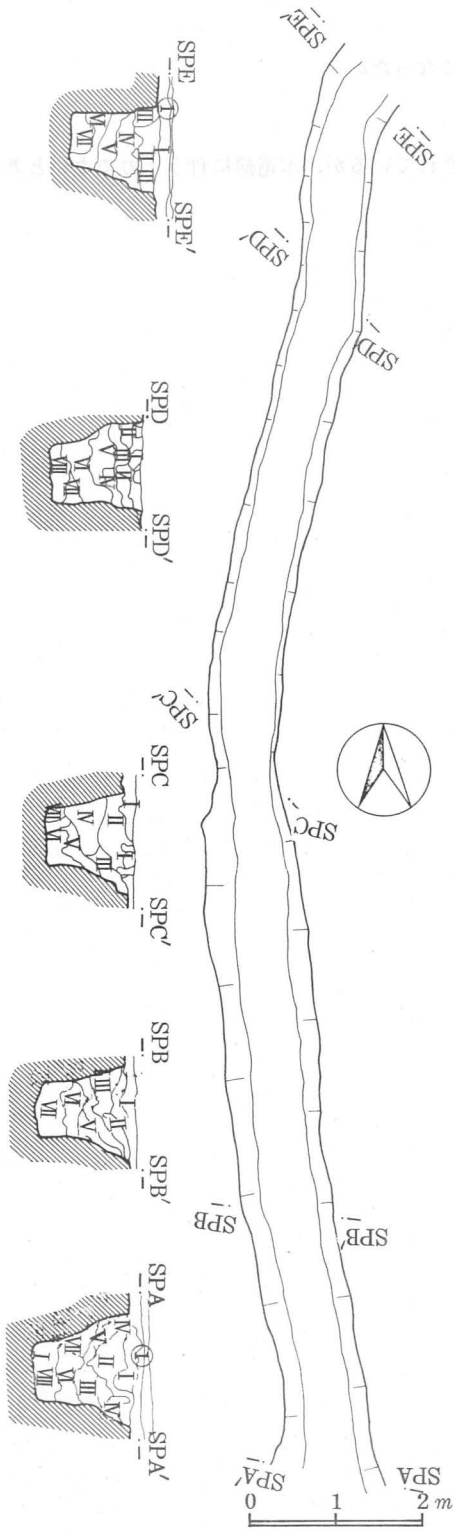
34は、磁器製の猪口、上ぐすりがかかり文様はない。35は、六角形の小鉢と思われる。

36～38は、染付の磁器茶碗。

いずれも、本遺構に伴うものでなく、後世の流入であろう。

第１表　第１号溝址出土　一覧表

No.	口　径	底　径 (高台径)	器　高 (現高)	色調　(表) (ウラ)	器　厚	ミクロ回転	高台の 有　無	備　考
7	13.0cm	6.0cm	3.9cm	茶　褐　色	0.3～1.0 cm	右	無	残存率　50%
8	13.6cm	6.8cm	3.9cm	〃	0.3～0.5 cm	右	無	残存率　60%
9	14.0cm	5.6cm	6.4cm	暗茶褐色	0.4～1.0 cm	右	無	残存率　40%
10	13.0cm	6.0cm	4.2cm	灰　褐　色	0.4～0.9 cm	左	無	完　形
11	13.8cm	6.0cm	3.9cm	淡　褐　色	0.4～0.8 cm	右	無	残存率　45%
12	14.0cm	(6.6cm)	5.8cm	灰　褐　色	0.6～0.9 cm	左	有	完　形
13		(6.0cm)	(3.0cm)	乳　灰　色	0.5～0.7 cm	左	有	残存率　20%
14		(7.4cm)	(5.7cm)	灰　褐　色	0.3～0.7 cm	右	有	残存率　30%
15	14.4cm	(6.6cm)	(5.4cm)	淡　褐　色	0.4～1.0 cm	左	有	残存率　50%
16		(6.4cm)	(2.0cm)	淡褐色 下位黒色	1.0　cm	右	有	底部のみ
17		(7.0cm)	(3.8cm)	乳　灰　色	0.6～0.9 cm	右	有	残存率　20%
18		(7.0cm)	(2.0cm)	淡　褐　色	0.4～0.8 cm	右	有	残存率　10%
19		(6.2cm)	(1.8cm)	乳　灰　色	0.7　cm	左	有	底部のみ
20		(7.0cm)	(2.0cm)	乳　灰　色	0.6～0.9 cm	右	有	〃
21	15.0cm	(7.0cm)	5.5cm	淡　褐　色	0.3～0.8 cm	左	有	残存率　20%
22	14.0cm	(7.0cm)	5.5cm	淡　灰　色	0.3～0.7 cm	右	有	残存率　80%
23	14.0cm		(5.0cm)	うす茶色	0.4　cm	右		
24		(7.4cm)	(3.5cm)	灰　褐　色	0.4～0.6 cm	左	有	残存率　20%
25	15.0cm		(5.0cm)	灰 茶	0.3～0.7 cm	右		
26		(6.4cm)	(3.5cm)	褐　色	0.4～0.7 cm	右	有	
27	14.0cm		(5.5cm)	う　す　茶	0.3～0.6 cm	左		破　片



第10図　第２号溝址平面図及び断面図

第２節　第２号溝　（第10図）

第２号溝址は、調査区北側、工事用道路の北、B－14. C－13. 14. D－12. 13. E－12グリットに位置する。

北側の調査区を、南北に、西へやや弧を描いて走行する。北側は、調査区域外へ、南側は工事用道跡下へ延びており、全体の形状は不明である。ただ工事用道路南側へは行っていないようである。

その規模は、確認された範囲で、幅70～95*cm*、長さ約17*m*、深さ94～97*cm*を計る、中型の溝状遺構である。壁はほぼ垂直に立ちあがり、溝底は、水平で凹凸はない。

覆土は、やや複雑ながらも、自然流入を示す。

第Ⅰ層：褐色土（粘性やや有り、しまり弱い）

第Ⅱ層：褐色土（粘性有り、しまり無し、Ⅰ層よりやや暗い）

第Ⅲ層：暗褐色土（粘性無し、しまり弱い）

第Ⅳ層：褐色土（粘性有り、しまり無し、焼土を少量混入）

第Ⅴ層：明褐色土（粘性有り、しまり弱い、焼土を多量混入）

第Ⅵ層：明褐色土（粘性有り、しまり有り。３～５*cm*程のロームブロック混入）

第Ⅶ層：明褐色土（Ⅵ層よりやや暗い。粘性、しまり有り。２～４*cm*程のロームブロック、多量混入）

第Ⅷ層：暗褐色土（粘性無し、しまりあり）

第Ⅸ層：暗褐色土（粘性弱く、しまりあり、炭化物粒子混入）

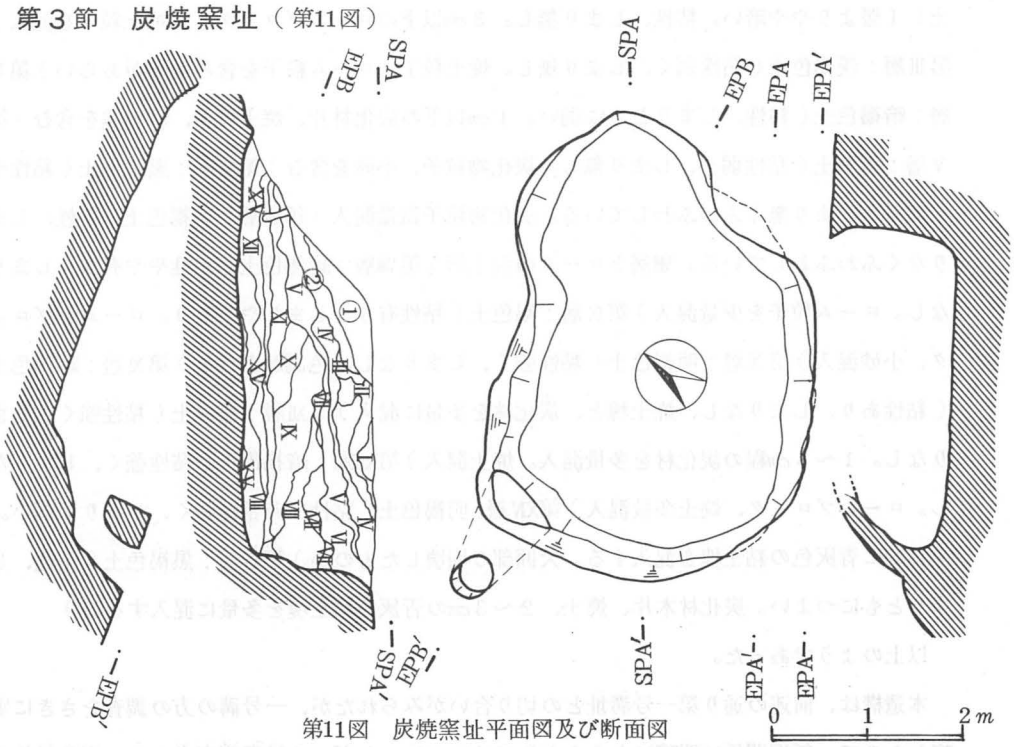
調査開始当初本遺構も、一号溝址に附随するものであるかと考えられたが、土層状況や、平

平形等からまったく別のものと考えられるようになった。

本遺構の性格は不明である。

また、覆土中より、縄文時代の遺物が、検出されているが、本遺構に伴うものでないと考えられる。

第３節　炭焼窯址（第11図）



第11図　炭焼窯址平面図及び断面図

本遺構は、調査区のほぼ中央部、J－10. 11. K－10. 11グリットで確認された。

平面形は、焼成部が、280×250 *cm*を計る隅丸の長方形、その北側に径１ *m*ほどの半円形の焚口部、南側に径30*cm*の煙道部を造り出している。

補修や、造りかえはみとめられないが、第１号溝址と切り合いがみとめられる。

当初一号溝址の調査を行っていたところ、南壁に炭化材や焼土が確認され、炭焼窯であることが判明した。

確認面は、ローム面で、天井部は削られ、確認できなかったが、焚口部周辺では、ロームのオーバハングしている状態が確認されている。

焼成部の壁は、ほぼ垂直に立ちあがり、一部はオーバーハングしている。深さは、104 *cm*を計る。床は、ほぼ水平で凹凸はない。

南西コーナーに、煙道が造られている。窯底から50*cm*上がった部分から、およそ50度の角度で掘りぬいている。

覆土は、17層に分けられる。

第①層：明褐色土（粘性ややあり、しまりよわい。ロームの層で、天井部の残りか？）第②層：明褐色土（粘性ややあり、しまりよわい。褐色土粒子を混入する）第Ⅰ層：明褐色土（粘性無し、しまりやや有り、１ *cm*以下の焼土ブロックを含みさらさらしている）第Ⅱ層：明褐色

土（Ⅰ層よりやや暗い。粘性、しまり無し。3㎝以下のロームブロックと、焼土粒子を混入）第Ⅲ層：淡褐色土（粘性弱く、しまり無し。焼土粒子、ローム粒子を含み粒子があらい）第Ⅳ層：暗褐色土（粘性、しまりともに弱い。1㎝以下の炭化材片、焼土粒子、粘土塊を含む）第Ⅴ層：褐色土（粘性弱く、しまり無し。炭化物粒子、小砂を含む）第Ⅵ層：黒褐色土（粘性やや有り、しまり無くふわふわしている。炭化物粒子微量混入）第Ⅶ層：黄褐色土（粘性、しまりなくふわふわしている。Ⅷ層とロームの混土層）第Ⅷ層：暗褐色土（粘性やや有り、しまりなし。ローム粒子を少量混入）第Ⅸ層：褐色土（粘性有り、しまりやや有り。ローム小ブロック、小砂混入）第Ⅹ層：明褐色土（粘性強く、しまりなし。色調がまだら）第Ⅺ層：暗褐色土（粘性あり、しまりなし、焼土塊と、炭化林を多量に混入）第Ⅻ層：黒色土（粘性強く、しまりなし。1～3㎝程の炭化材を多量混入。焼土混入）第XIII層：暗褐色土（粘性強く、しまりなし。ロームブロック、焼土多量混入）第XIV層：明褐色土（粘性は非常に強く、しまりは弱い。全体的に青灰色の粘土塊を混入する。天囲部の崩壊したものか）第XV層：黒褐色土（粘性、しまりともにつよい。炭化材木片、焼土、2～3㎝の青灰色粘土塊を多量に混入する。）

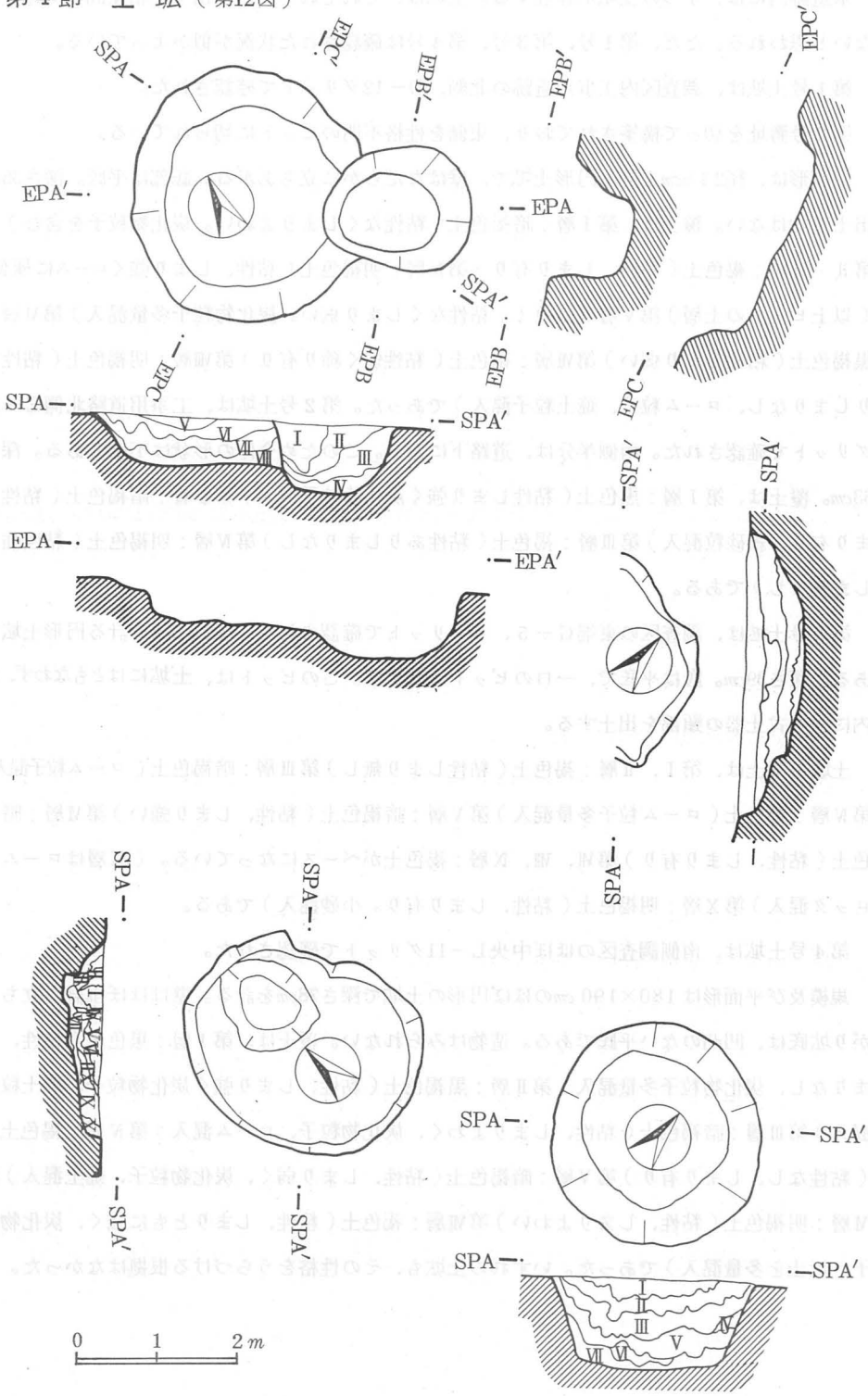
以上のようであった。

本遺構は、前述の通り第一号溝址との切り合いがみられたが、一号溝の方の調査をさきに実施したので、新旧関係は明確にとらえられてはいない。ただ、1号溝調査中より、炭化材片や焼土が確認されていたことより、本遺構の方が新しいものと考えられる。又、本遺構内にテフラ（浅門　軽石）が確認されてないことからも判断が可能であろう。

本遺構は、第1号溝址が、埋没しきらない間に造られたと考えることができる。溝状遺構の南壁斜面部を利用し、斜面部に足場（焚口部）を造り、焼成部をくりぬき、天囲部は、ローム又は、青色粘土（土層中第XIV層にあたる）を使っていたものと考えられる。

本遺跡内では、本遺構をのぞいて炭焼窯は確認できない。本遺構が、どのような背景のもとに造られたのか明確な根拠はないが、本遺跡のような平坦地に炭焼窯が存在することは、おもしろい。

第４節　土　坑（第12図）



第12図　第1. 2. 3. 4号土坑平面図及び断面図

本遺跡内には、４つの土坑が存在する。土坑は、それぞれ単独の検出で、相互間の関連性はないと思われる。ただ、第１号、第３号、第４号は確認された状況が似かよっている。

第１号土坑は、調査区内工事用道跡の北側、D－12グリットで確認された。

第２号溝址を切って構築されており、東側を性格不明のピットに切られている。

平面形は、径215*cm*を計る円形土坑で、壁はなだらかに立ちあがる。底部は平底。深さ35*cm*、出土遺物はない。覆土は、第Ⅰ層：暗褐色土（粘性なくしまりよわい。炭化物粒子を含む）第Ⅱ・Ⅲ層：褐色土（粘性、しまり有り）第Ⅳ層：明褐色土（粘性、しまり強くロームに極似）（以上ピットの土層）第Ⅴ層：黒色土（粘性なくしまり弱い。炭化物粒子多量混入）第Ⅵ層：黒褐色土（粘性しまり弱い）第Ⅶ層：褐色土（粘性弱く締り有り）第Ⅷ層：明褐色土（粘性有りしまりなし、ローム粒子、焼土粒子混入）であった。第２号土坑は、工事用道路北側E－12グリットで確認された。南側半分は、道路下にある。このため全体の形状は不明である。深さ63*cm*。覆土は、第Ⅰ層：黒色土（粘性しまり強く炭化物粒子混入）第Ⅱ層：暗褐色土（粘性しまり有り、細砂粒混入）第Ⅲ層：褐色土（粘性ありしまりなし）第Ⅳ層：明褐色土（粘性強くしまりなし）である。

第３号土坑は、調査区の東端G－５、６グリットで確認された。径205*cm*を計る円形土坑である。深さ39*cm*。底は平底で、一口のピットを有する。このピットは、土坑にはともなわず、土内に弥生式土器の頸部を出土する。

土坑の覆土は、第Ⅰ、Ⅱ層：褐色土（粘性しまり無し）第Ⅲ層：暗褐色土（ローム粒子混入）第Ⅳ層：褐色土（ローム粒子多量混入）第Ⅴ層：暗褐色土（粘性、しまり強い）第Ⅵ層：暗褐色土（粘性、しまり有り）第Ⅶ、Ⅷ、Ⅸ層：褐色土がベースになっている。（Ⅸ層はロームブロック混入）第Ⅹ層：明褐色土（粘性、しまり有り。小砂混入）である。

第４号土坑は、南側調査区のほぼ中央L－11グリットで確認された。

規模及び平面形は180×190 *cm*のほぼ円形の土坑で深さ78*cm*を計る。壁はほぼ垂直に立ち上がり坑底は、凹凸のない平底である。遺物はみられない。覆土は、第Ⅰ層：黒色土（粘性、しまりなし、炭化物粒子多量混入）第Ⅱ層：黒褐色土（粘性、しまり強く炭化物粒子、焼土粒子混入）第Ⅲ層：暗褐色土（粘性、しまりよわく、炭化物粒子、ローム混入）第Ⅳ層：褐色土（粘性なし、しまり有り）第Ⅴ層：暗褐色土（粘性、しまり弱く、炭化物粒子、焼土混入）第Ⅵ層：明褐色土（粘性、しまりよわい）第Ⅶ層：褐色土（粘性、しまりともに強く、炭化物粒子、焼土を多量混入）であった。いずれの土坑も、その性格をうらづける根拠はなかった。

第６章　出　土　遺　物

第１節　先土器時代

本遺跡では、先土器時代の遺物集中箇所が確認された。分布状況から考えると６ヶ所の集中箇所がある。これは、分布状況から見たものであり、各集中箇所内での接合や精査が行なわれていないので、ここでは、ユニットという言葉を使用しないこととする。（第２図）

いずれも、暗色帯上部のハードローム層で確認されている。

第１号遺物集中箇所は、Ｂ－12グリットを中心に広がっている。広がりの範囲は、径３ｍ程の円形を呈する。黒曜石のフレイクを中心としたもので、内に頁岩製の核が存在する。

第２号遺物集中箇所は、Ｃ、Ｄ－12、13グリットを中心に広がっている。径は２ｍ、黒曜石のフレイク、チップを中心としている。少しはなれた位置より、黒曜石製のポイントが出土している。

１号、２号の遺物集中箇所は、比較的近い所に位置しており、この２つの集中箇所をとりまくように、フレイク、チップ類が出土しており、１つのものであるかもしれない。

第３号遺物集中箇所は、Ｏ、Ｐ－４グリットを中心とする広がりである。範囲は４ｍ程あり楕円形を呈する。硬砂岩のフレイク、チップで構成され、礫を持つ。集中している。

第４号遺物集中箇所は、Ｌ、Ｍ－９、10グリットで検出された。

チップのみの出土で散布している。

第５号遺物集中箇所は、Ｌ－17グリットを中心として広がっている。範囲は径３ｍ程で、核チップ、礫からなる。集中している。

第６号遺物集中箇所は、Ｏ－15、16グリットが中心、範囲は８ｍ×４ｍの楕円形を呈し、かなり分散する。

先土器時代の遺物は総計８５点有り、ポイント、マイクロブレイド、スクレイパー、コア、ピック、フレイク、チップ等があり、フレイク、チップが大多数をしめる。

これらのうち、ここでは製品を中心に27点図面化した。

次に遺物の説明を加えることとする。

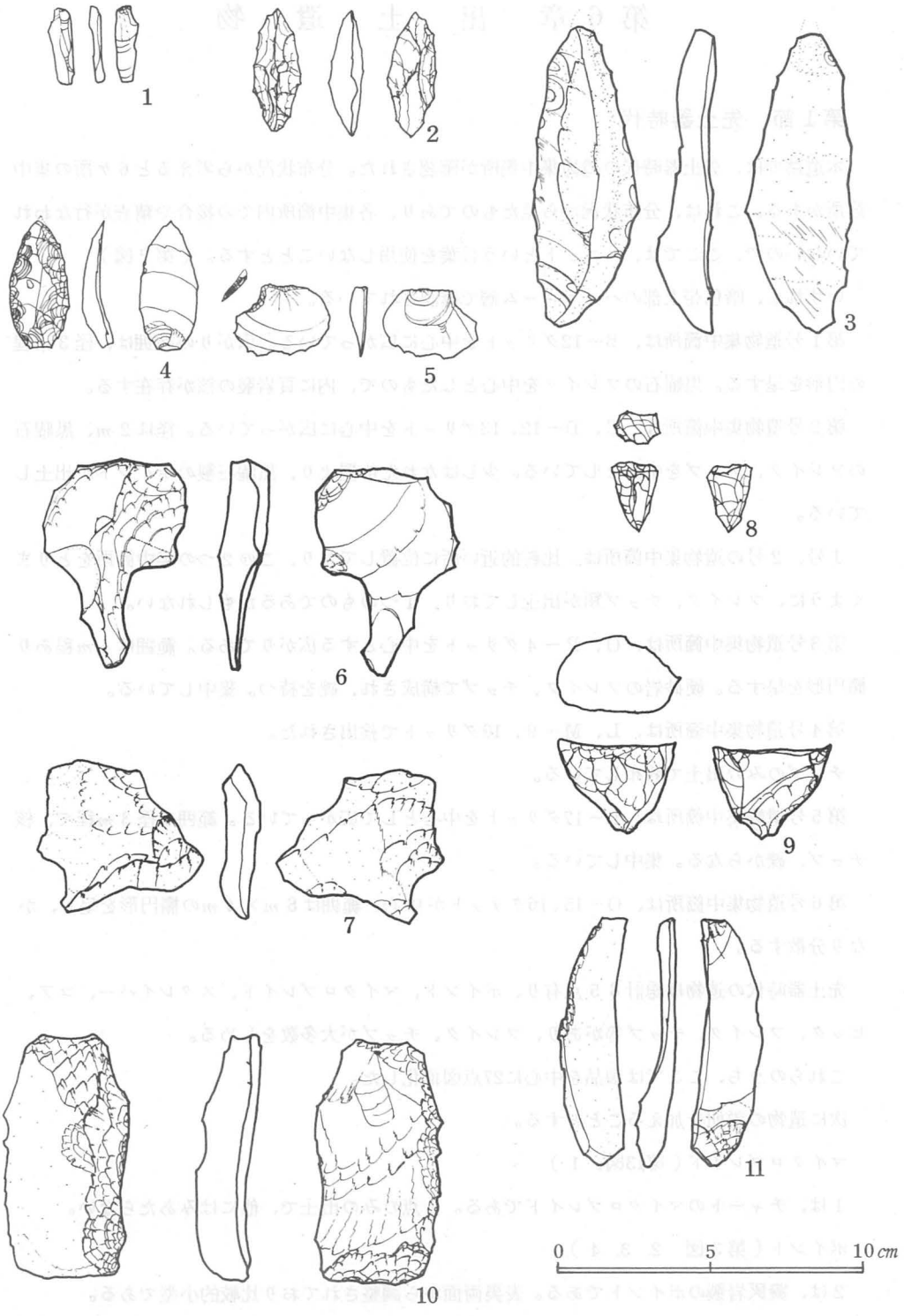
マイクロブレイド（第13図、１）

１は、チャートのマイクロブレイドである。１点のみの出土で、他にはみあたらない。

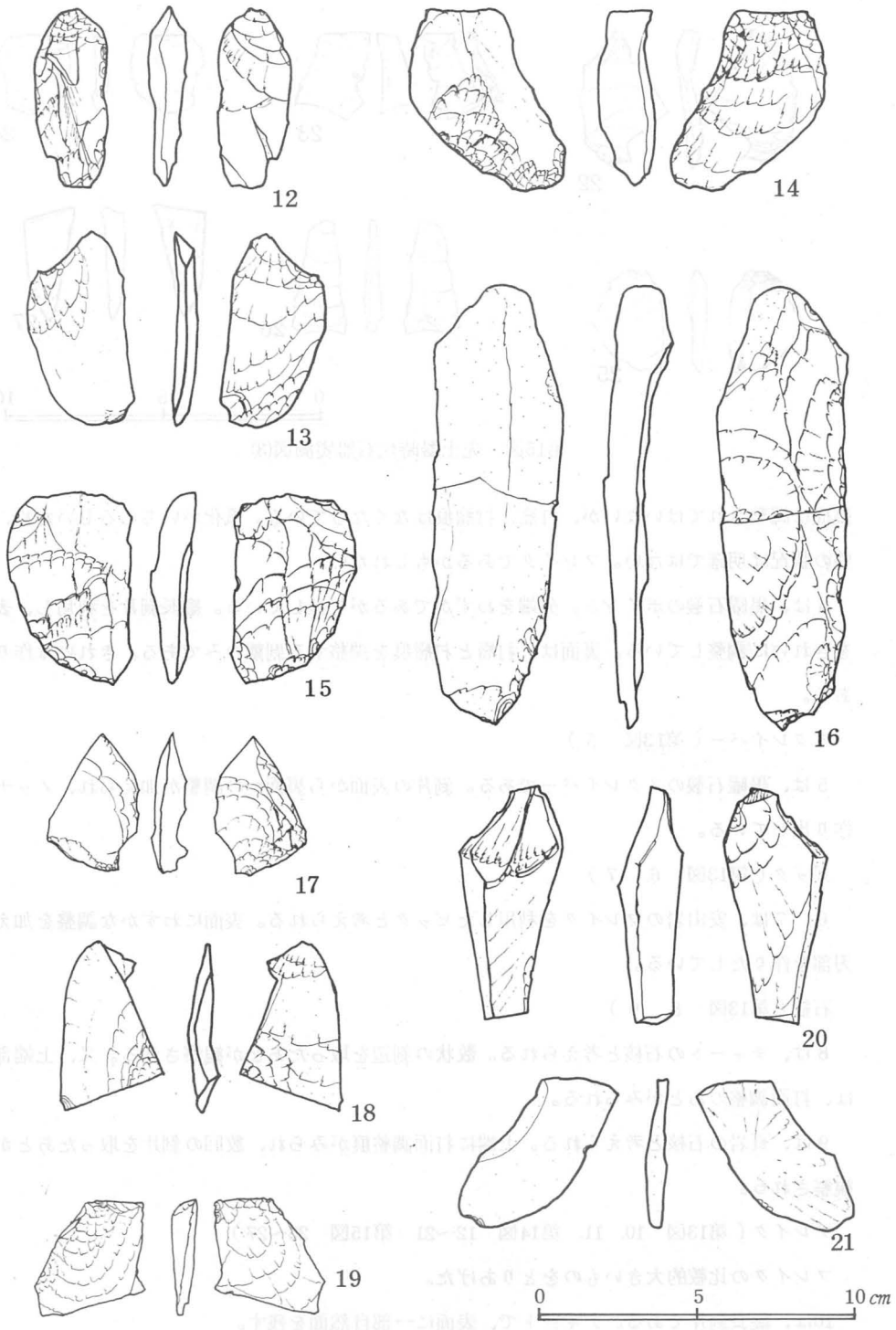
ポイント（第３図　2. 3. 4）

２は、凝灰岩製のポイントである。表裏両面から調整されており比較的小型である。

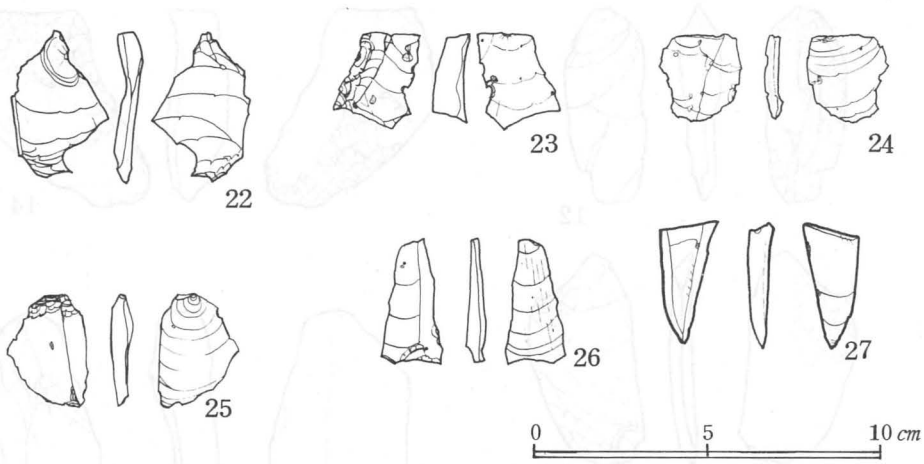
３は、安山岩製のポイントである。比較的大きな縦長剝辺を利用し、表面を調整している。



第13図　先土器時代石器実測図(1)



第14図　先土器時代石器実測図(2)



第15図　先土器時代石器実測図(3)

裏面は調整されてはいないが、打瘤、打瘤痕はなくなっている。風化がいちじるしいため、調整の状況は明確ではない。フレイクであるかもしれない。

4は、黒曜石製のポイント。先端をわずかであるが欠担している。縦長剝片を利用し、表面をきれいに調整している。裏面は、打瘤と打瘤痕を調整する剝離のみである。きれいな作りである。

スクレイパー（第13図　5）

5は、黒曜石製のスクレイパーである。剝片の表面から裏面への調整が加えられ、ノッチを作り出している。

ピック（第13図　6.　7）

6、7は、安山岩のフレイクを利用したピックと考えられる。表面にわずかな調整を加え、刃部を作りたしている。

石核（第13図　8.　9）

8は、チャートの石核と考えられる。数状の剝辺を取ったあとが観察される。又、上端部には、打面調整のあとがみられる。

9は、頁岩の石核と考えられる。上端に打面調整痕がみられ、数回の剝片を取ったあとが、観察される。

フレイク（第13図　10.　11.　第14図　12～21　第15図　23～27）

フレイクの比較的大きいものをとりあげた。

10は、縦長剝片である。チャートで、表面に一部自然面を残す。

11は、砂岩の縦長剝片。表面は自然面である。表面に一部調整がみられる。

12、13、14は、チャートの縦長剝片である。12. 13には一部自然面がのこる。14は、打面が表と裏で逆の位置にある。

15はチャートの縦長剝片。表面に一部自然面をのこす。表面左辺、にブランディング様の調整が残り、とするとナイフ形石器と考えられる。

16は大型の剝片で、表面は自然面のみで、硬砂岩である。裏面は、左右横位から打たれている。

17、18、19、20は、チャートのフレイク。いずれも、定形の剝離はみられない。18は横長剝辺か？

21は、砂岩の横長剝片か？。表面には自然面が残る。

22～27は、黒曜石の縦長剝片である。23、24、25は、中に腐があるものの、いずれも、透明感の良い黒曜石を使用している。同一母岩か？。

23には、表面左辺に、裏面からの調整がみられる。

26、27は、きれいなフレイクである。

これらの先土器時代の遺物については、前述の通り、相互間での接合を行なっていないため個体別資料の調査は行なわれていない。

ただ大まかにみてみれば、やはり、チャートが最も多い。次に黒曜石である。その他は、ほぼ同じ割合で使用されている。

チャートについては、付近（群馬県内）においても採取することが出来る。

黒曜石については、現在鑑定中であるがおそらく箱根産のものと考えられる。

館林地方は、現在では、石や岩の入手が困難な地方である。これは、本地方が、利根川、渡良瀬川の下流域にあたり、砂やシルト、粘土等の堆積地帯となっているためであるが、石器類の整査が行なわれれば、その搬入経路も明確にしていけると思う。

第２節　縄文時代

次に縄文時代の遺物について説明を加えることとする。

その分布については、第３図に示した。

本遺跡での出土遺物の中心は、縄文時代のものであった。しかしながら、この遺物に伴う遺構は、検出できなかった。

遺物の出土は、調査区の全体から検出できたが、特に、Ｂ、Ｃ、Ｄライン（特に西側）、Ｇ－10、11グリット、Ｋ、Ｌ－６グリット、Ｊ・Ｋ－９・10グリット、Ｎ・Ｏ－２・３・４グリット、Ｍ・Ｎ－９、10グリット、Ｎ・Ｏ－15・16グリットを中心として、集中がみられた。

一昨年度より調査した「大袋Ⅱ遺跡」の経験で、これらの遺物集中箇所の土層断面の確認や平面プランの確認等の精査を実施することで、住居址を検出できたこと等を考え、それぞれの集中箇所に、トレンチを設定、精査を実施したが、遺構は検出できなかった。

このようなことから、集中箇所を掘り下げ、遺物の分布図を作成するとともに、遺物の検出につとめた。こうして、片の遺物についての図面を作成した。

遺物の分布を調査区全体を通してみてみるならば、工事用道路北側（Ｂ、Ｃ、Ｄライン）に多く集中している。特に、その西側では集中が著じるしい。

しかしながら、これらの遺物の接合を実施していくと、接合できたものは少ない。

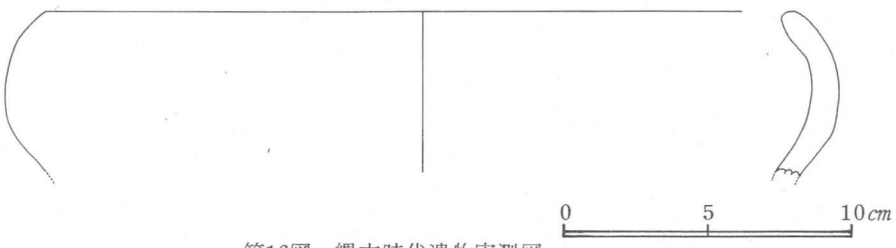
実測できたのは１個体しかなかった。（第16図）

これは、縄文時代中期の浅鉢の口縁部の破片である。口径40*cm*、現高8.8*cm*、器厚1.0～1.5 *cm*を計測する。文様はない。色調は赤褐色を呈し一部焼成をうけ黒くなっている。胎土に長石を含み、焼成は良好である。

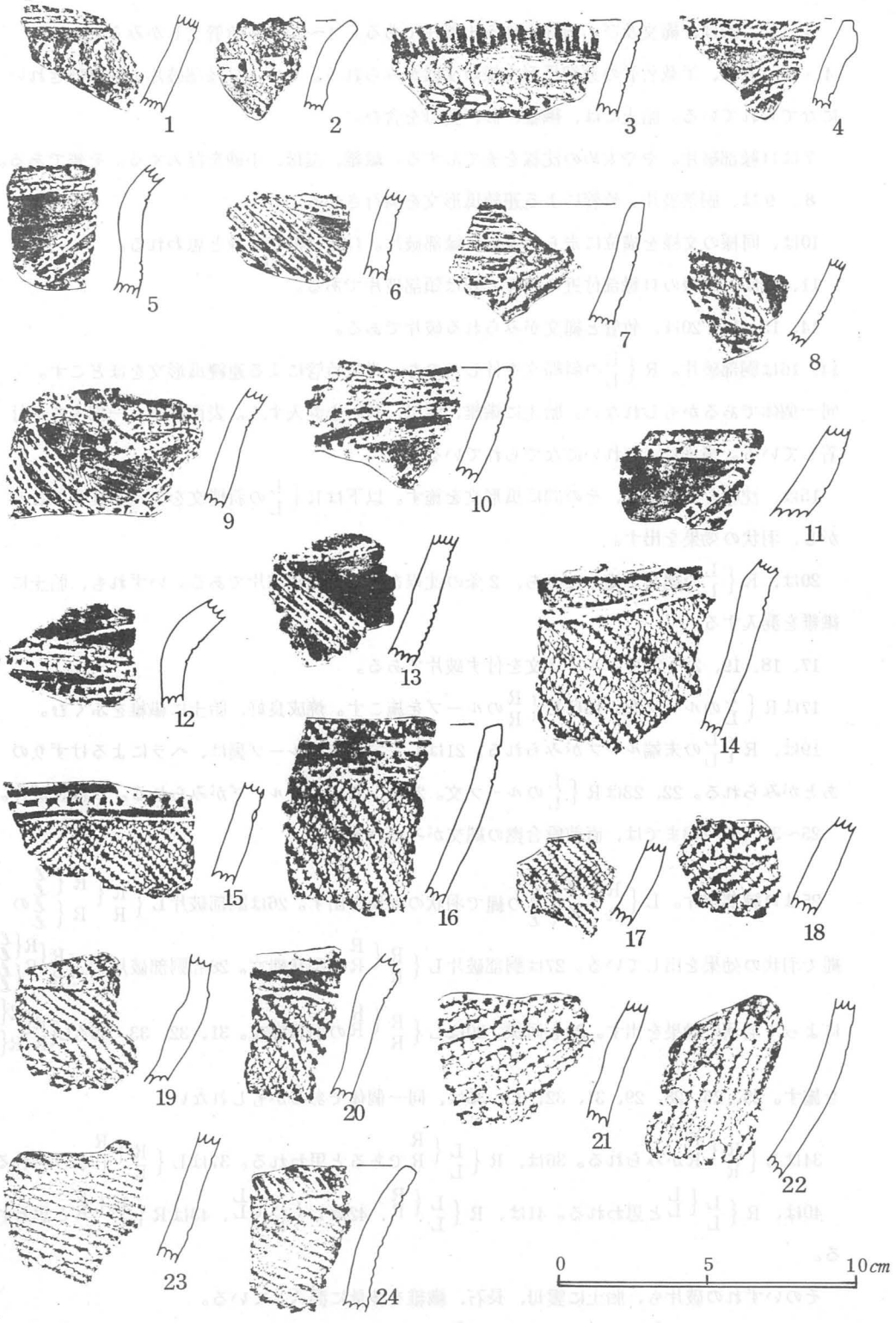
次に、拓本したものをあげる。98片ほどとりあげた。（第17図、第18図、第19図、第20図、第21図）

１～３は、貝がら腹縁による文様をもつ。１、２は同一個体と思われる。

口唇部は、貝がら腹縁を押しつけ波状に作り出されている。貝がら腹縁の刺突を地文に、竹管による沈線や押引き沈線がみられる。３は、口縁折り返し口縁、その上を半載竹管による刺突、以下に、貝がら腹縁による瓜形文、竹管文がみられる。いずれも焼成良、胎土に細石混入する。



第16図　縄文時代遺物実測図



第17図　縄文時代土器群拓影(1)

4～16、20は、縄文及び、竹管を作う土器片である。4～13は、竹管文しかみられない。4・5・6は、半載竹管の連続瓜形文様の文様がみられる。5は、口縁部破片。内側はきれいになでられている。胎土には、繊維、砂、雲母を含む。

7は口縁部破片。やや太めの沈線を充てんする。繊維、雲母、小砂を混入する。そ雑である。

8、9は、胴部破片。竹管による連続瓜形文を斜行させる。

10は、同様の文様を横位に走らせる。口縁部破片。口縁は波状口縁と思われる。

11、12は、同様の口縁部付近の破片。12は頸部破片である。

14、15、16、20は、竹管と縄文がみられる破片である。

14、16は胴部破片。R$\left\{\begin{matrix}L\\L\end{matrix}\right.$の斜縄文を付したのち、半載竹管による連続瓜形文をほどこす。同一個体であるかもしれない。胎土に繊維、雲母、長石を混入する。表面には、一部ススが付着している。裏面は、きれいになでられている。

15は、沈線を2条施し、その間に瓜形文を施す。以下はR$\left\{\begin{matrix}L\\L\end{matrix}\right.$の斜縄文を方向を変えてころがし、羽状の効果を出す。

20は、R$\left\{\begin{matrix}L\\L\end{matrix}\right.$の縄文を施したのち、2条の沈線を付した頸部破片である。いずれも、胎土に繊維を混入する。

17、18、19、21～24は、ループ文を付す破片である。

17はR$\left\{\begin{matrix}L\\L\end{matrix}\right.$のループを、18はL$\left\{\begin{matrix}R\\R\end{matrix}\right.$のループを施こす。焼成良好、胎土に繊維をふくむ。

19は、R$\left\{\begin{matrix}L\\L\end{matrix}\right.$の末端ループがみられる。21はL$\left\{\begin{matrix}R\\R\end{matrix}\right.$の末端ループ裏は、ヘラによるけずりのあとがみられる。22、23はR$\left\{\begin{matrix}L\\L\end{matrix}\right.$のループ文。24は、R$\left\{\begin{matrix}L\\L\end{matrix}\right.$のループがみられる。口縁部破片。

25～37、40～43までは、直前段合撚の縄文がみられる。

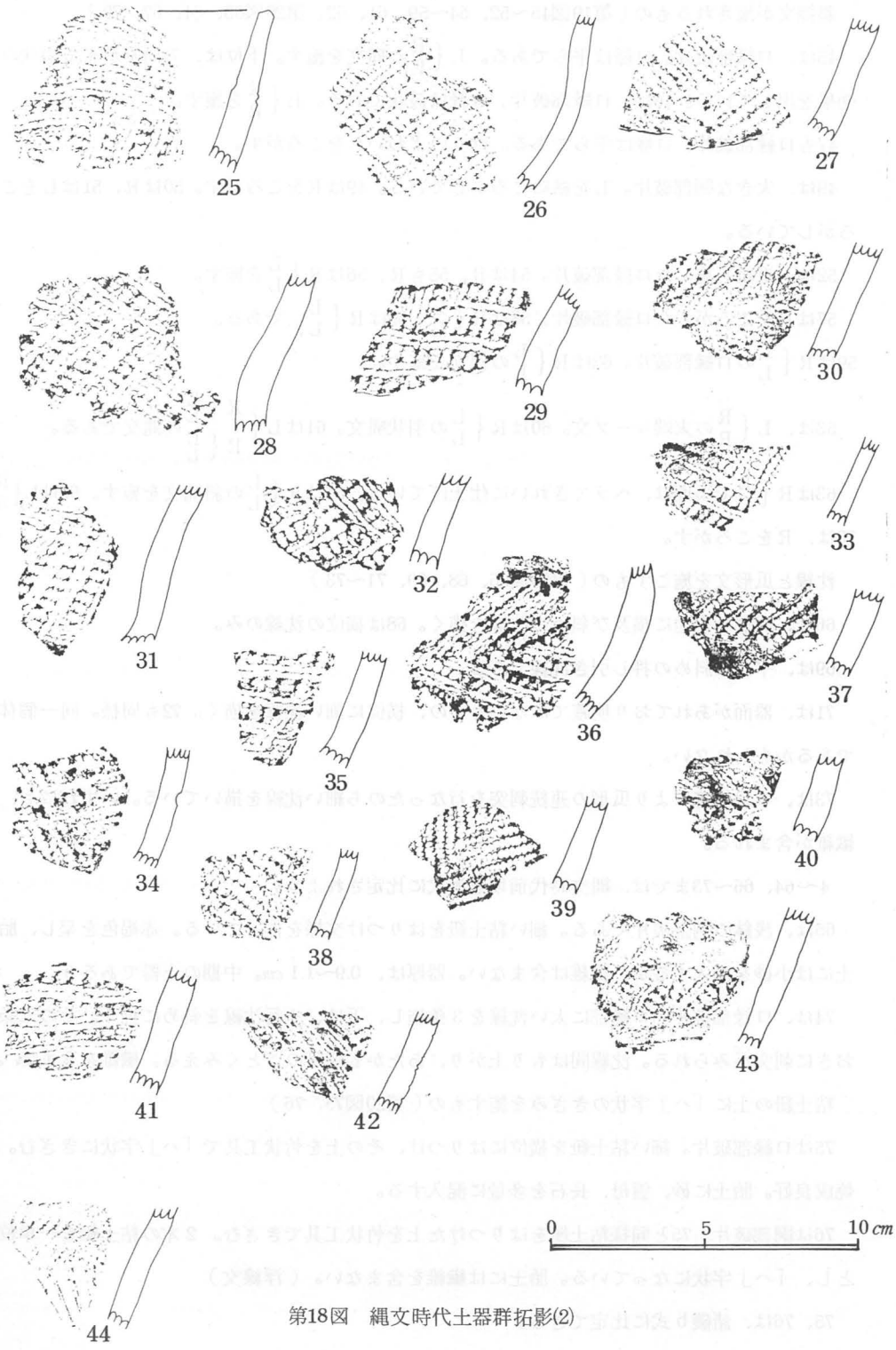
25は口縁部破片。L$\left\{\begin{matrix}R\left\{\begin{matrix}R\left\{\begin{matrix}\ell\\\ell\end{matrix}\right.\\R\left\{\begin{matrix}\ell\\\ell\end{matrix}\right.\end{matrix}\right.\\R\end{matrix}\right.$の縄で羽状の効果を出す。26は胴部破片L$\left\{\begin{matrix}R\left\{\begin{matrix}R\left\{\begin{matrix}\ell\\\ell\end{matrix}\right.\\R\left\{\begin{matrix}\ell\\\ell\end{matrix}\right.\end{matrix}\right.\\R\end{matrix}\right.$の縄で羽状の効果を出している。27は胴部破片L$\left\{\begin{matrix}R\left\{\begin{matrix}R\\R\end{matrix}\right.\\R\end{matrix}\right.$の羽状縄文。28も胴部破片。L$\left\{\begin{matrix}R\left\{\begin{matrix}R\left\{\begin{matrix}\ell\\\ell\end{matrix}\right.\\R\left\{\begin{matrix}\ell\\\ell\end{matrix}\right.\end{matrix}\right.\\R\end{matrix}\right.$によって羽状の効果を出す。29も同様。30はL$\left\{\begin{matrix}R\left\{\begin{matrix}R\\R\end{matrix}\right.\\R\end{matrix}\right.$の羽状縄文。31、32、33、35もL$\left\{\begin{matrix}R\left\{\begin{matrix}R\left\{\begin{matrix}\ell\\\ell\end{matrix}\right.\\R\left\{\begin{matrix}\ell\\\ell\end{matrix}\right.\end{matrix}\right.\\R\end{matrix}\right.$を施す。25、26、28、29、31、32、33、35は、同一個体であるかもしれない。

34はL$\left\{\begin{matrix}R\left\{\begin{matrix}R\\R\end{matrix}\right.\\R\end{matrix}\right.$がみられる。36は、R$\left\{\begin{matrix}L\left\{\begin{matrix}R\\R\end{matrix}\right.\\L\end{matrix}\right.$であると思われる。37はL$\left\{\begin{matrix}R\left\{\begin{matrix}R\\R\end{matrix}\right.\\R\end{matrix}\right.$がみられる。

40は、R$\left\{\begin{matrix}L\left\{\begin{matrix}L\\L\end{matrix}\right.\\L\end{matrix}\right.$と思われる。41は、R$\left\{\begin{matrix}L\left\{\begin{matrix}R\\R\end{matrix}\right.\\L\end{matrix}\right.$、42はL$\left\{\begin{matrix}R\left\{\begin{matrix}L\\L\end{matrix}\right.\\R\end{matrix}\right.$、43はR$\left\{\begin{matrix}L\left\{\begin{matrix}R\\R\end{matrix}\right.\\L\end{matrix}\right.$と思われる。

そのいずれの破片も、胎土に雲母、長石、繊維を多量に混入している。

38は胴部破片R$\left\{\begin{matrix}L\\L\end{matrix}\right.$の斜縄文、39はL$\left\{\begin{matrix}R\\R\end{matrix}\right.$の羽状縄文。赤褐色を呈し、繊維を混入する。



第18図　縄文時代土器群拓影(2)

44はL{R/R}の斜縄文下に条線が描かれる。

斜縄文が施されるもの（第19図45～52、54～59、61、62、第20図63、64、67、70）

45は、口縁部破片。口縁は平らである。L{R/R}の縄文を施す。下位は、方向をかえて羽状の効果を出している。46は、口縁部破片。口縁は波状である。L{R/R}を施す。

47も口縁部破片。口縁は平らである。撚りのよわいLをころがす。

49は、大きな胴部破片。Lを横にころがしている。49はRをころがす。50はR、51はLをころがしている。

52は、組紐を施した口縁部破片。54はR、55もR、56はR{L/L}を施す。

57はRをころがした口縁部破片。58はR{L/L}、59はR{L/L}、である。
59はR{L/L}の口縁部破片。62はR{L/L}の縄文を施す。

53は、L{R/R}の末端ループ文。60はR{L/L}の羽状縄文。61はL{R{L/L} / R{L/L}}の縄文である。

63はR{L/L}で裏面は、ヘラできれいに仕上げている。64はR{L/L}の斜縄文を施す。67はL{R/R}、70は、Rをころがす。

沈線と瓜形文を施こすもの（第20図66、68、69、71～73）

66は、縄文を素地に横及び斜めの沈線を描く。68は横位の沈線のみ。

69は、平行な斜めの押し引き沈線である。

71は、器面があれており明確ではないものの、横位に細い沈線を描く。72も同様。同一個体であるかもしれない。

73は、半裁竹管により瓜形の連続刺突を行なったのち細い沈線を描いている。いずれにも、繊維が含まれる。

4～64、66～73までは、縄文時代前期黒浜式に比定されよう。

65は、浅鉢の胴部破片である。細い粘土紐をはりつけ文様を作っている。赤褐色を呈し、胎土には小砂を混入するが、繊維は含まない。器厚は、0.9～1.1 *cm*。中期の土器であろう。

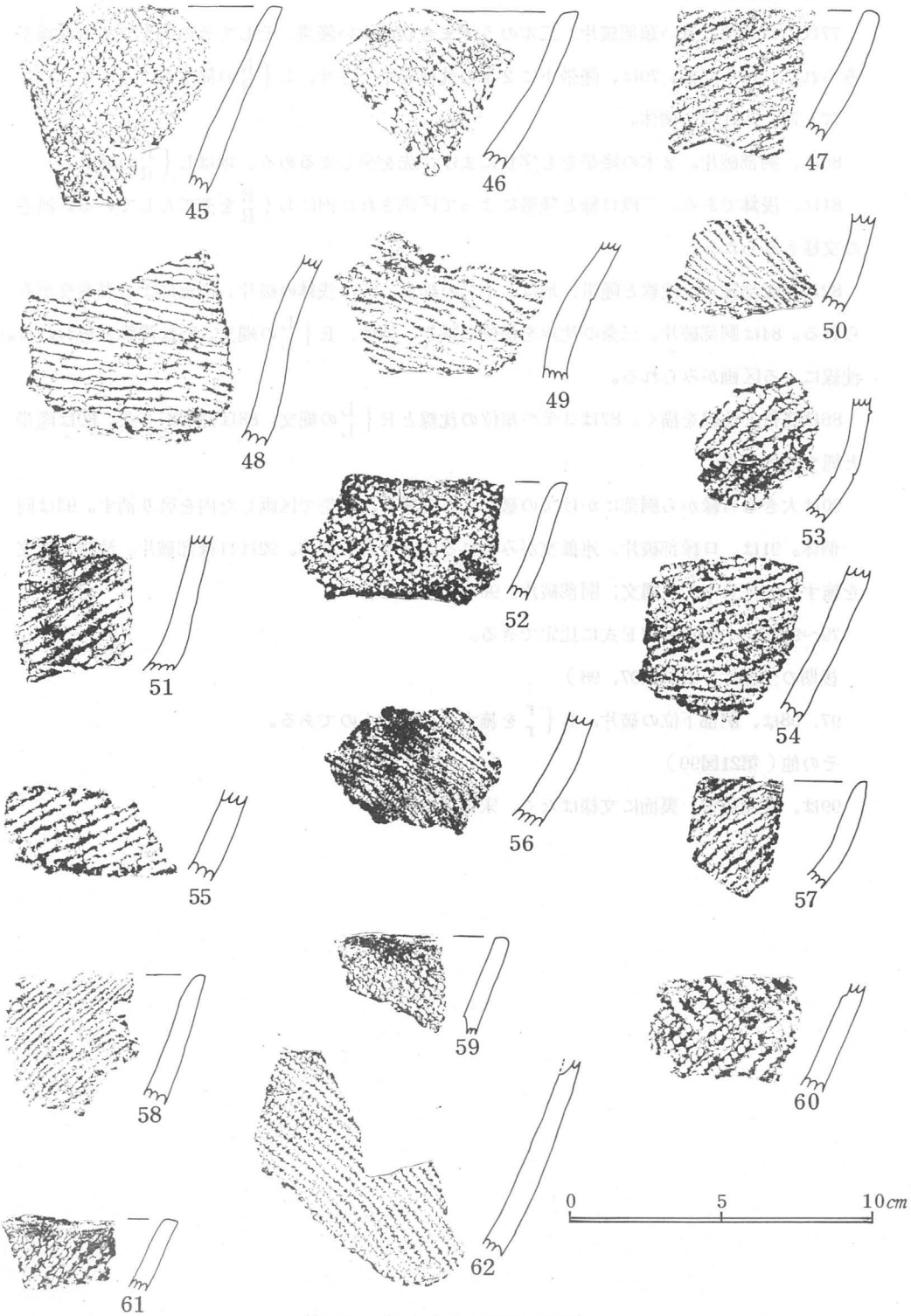
74は、口縁部破片。口縁部に太い沈線を3条施し、下は、平行沈線を斜めに描く。その三条おきに刺突がみられる。沈線間はもり上がり、あたかも隆帯のごとくみえる。繊維を含まない。

粘土紐の上に「ハ」字状のきざみを施すもの（第20図75、76）

75は口縁部破片。細い粘土紐を横位にはりつけ、その上を竹状工具で「ハ」字状にきざむ。焼成良好。胎土に砂、雲母、長石を多量に混入する。

76は胴部破片。75と同様粘土紐をはりつけた上を竹状工具できざむ。2本の粘土紐を一単位とし、「ハ」字状になっている。胎土には繊維を含まない。（浮線文）

75、76は、諸磯b式に比定できる。



第19図　縄文時代土器群拓影(3)

中期の土器群（第20図77～80、第21図81～96）

77は、口縁部に近い頸部破片。二本のうずまき状の太い隆帯、そしてその間をうめる沈線がみられる。78も同様。79は、隆帯下に２本の沈線を垂下させ、L$\left\{\begin{matrix}R\\R\end{matrix}\right.$の縄文をころがす。

77、78、79は同一個体。

80は、胴部破片。２本の隆帯をL字状にまげ、先を少しまるめる。地はL$\left\{\begin{matrix}R\\R\end{matrix}\right.$の縄文。

81は、浅鉢である。二段口縁と隆帯によって区画された内にL$\left\{\begin{matrix}R\\R\end{matrix}\right.$を充てんしている。渦巻の文様もみられる。

82は口縁部破片。沈線と隆帯、地はL$\left\{\begin{matrix}R\\R\end{matrix}\right.$の縄文。83は浅鉢の破片。沈線による渦巻文がみられる。84は胴部破片。三条の沈線を横位に描き、地は、R$\left\{\begin{matrix}L\\L\end{matrix}\right.$の縄文。85は浅鉢と思われる。沈線による区画がみられる。

86は隆帯と沈線を描く。87は３条の縦位の沈線とR$\left\{\begin{matrix}L\\L\end{matrix}\right.$の縄文。88は沈線が２条。89は隆帯と縄文を施こす。

90は大きな口縁から胴部にかけての破片。Lを施し、隆帯で区画した内を磨り消す。93は同一個体。91は、口縁部破片。連孤文がみられる。94は同一個体。92は口縁部破片。沈線と縄文を施す。95はR$\left\{\begin{matrix}L\\L\end{matrix}\right.$の縄文、胴部破片。96も同様。

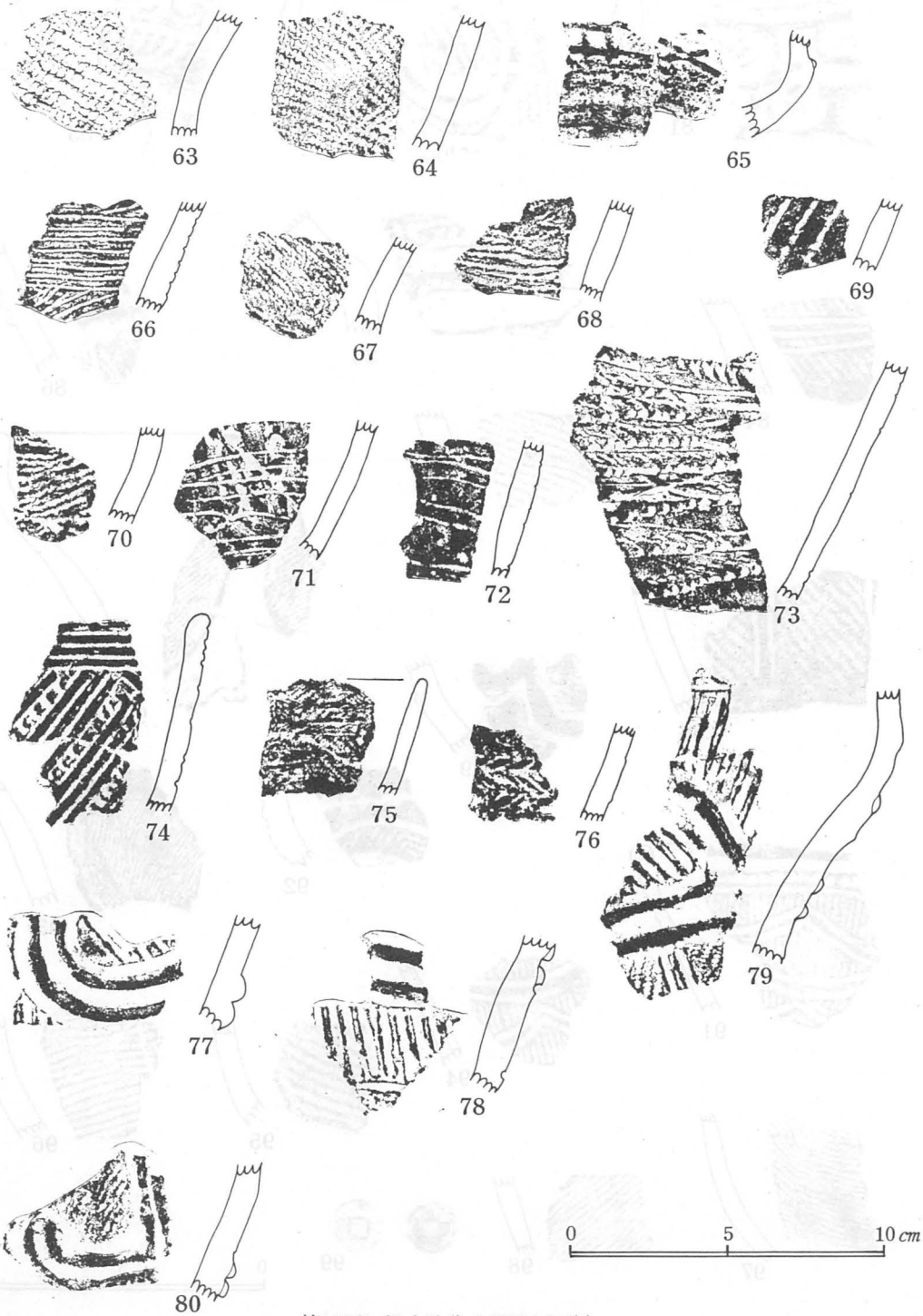
79～96は、中期加曽利E式に比定できる。

後期の土器片（第21図97、98）

97、98は、胴部下位の破片。L$\left\{\begin{matrix}r\\r\end{matrix}\right.$を施す。後期のものである。

その他（第21図99）

99は、寛永通宝。裏面に文様はなく、宋書体である。



第20図　縄文時代土器群拓影(4)

第21図　縄文時代土器群拓影(5)

石　器

縄文時代に比定できる石器類は、８８片あった。ここでは、このうち定形のもの20点を実測した。

本遺跡で出土した石器類の数は、少ない。その種類は、石鏃、石斧、凹石、台石、装飾品、剝片、礫等がある。

次に、それぞれに説明を加える。

石鏃。（第22図１～11）

１は黒曜石製の石鏃。全面に調整がなされ、きれいな作りである。ハート型。２は、チャートの石鏃。きれいな作りである。ハート型。３も同様。４もチャート製の石鏃。左脚部を欠損する。全面調整されているが、ややゆがんでいる。ハート型。５もチャートの石鏃。左脚部を欠損する。三角形を呈する。やや雑な作りである。

６はチャートの石鏃。右脚部欠損。三角型であるが基部はえぐられている。雑な作り。

７はチャートの石鏃。右脚部、先端部を欠損する。ていねいな作りである。抉りがかなり深い。

８は、チャートの石鏃。先端部を欠損する。茎を有する量一のものである。比較的雑な作り。

９は、凝灰岩製の石鏃。風化しているため、調整は明確でない。細味のハート型。

10は、チャートの石鏃。雑な作りである。三角型。

11は、チャートの石鏃。周辺部のみ調整がみられる。三角型。

石斧（第22図、12～16）

12は、分銅型の打製石斧。刃部はかなり使用され磨耗している。表裏両面より調整されている。裏面に一部自然面をのこす。

13は、分銅型の打製石斧である。上部を欠損する。全面に調整がみられる。

14は、小型の打製石斧。剝片を利用したものと思われ、うすい作りである。ていねいな作りである。15は、撥型の打製石斧である。刃部は欠損している。表裏面に自然面をのこす。

16は、磨製の石斧。一部整形のための調整はみられるが、刃部はよくみがかれている。

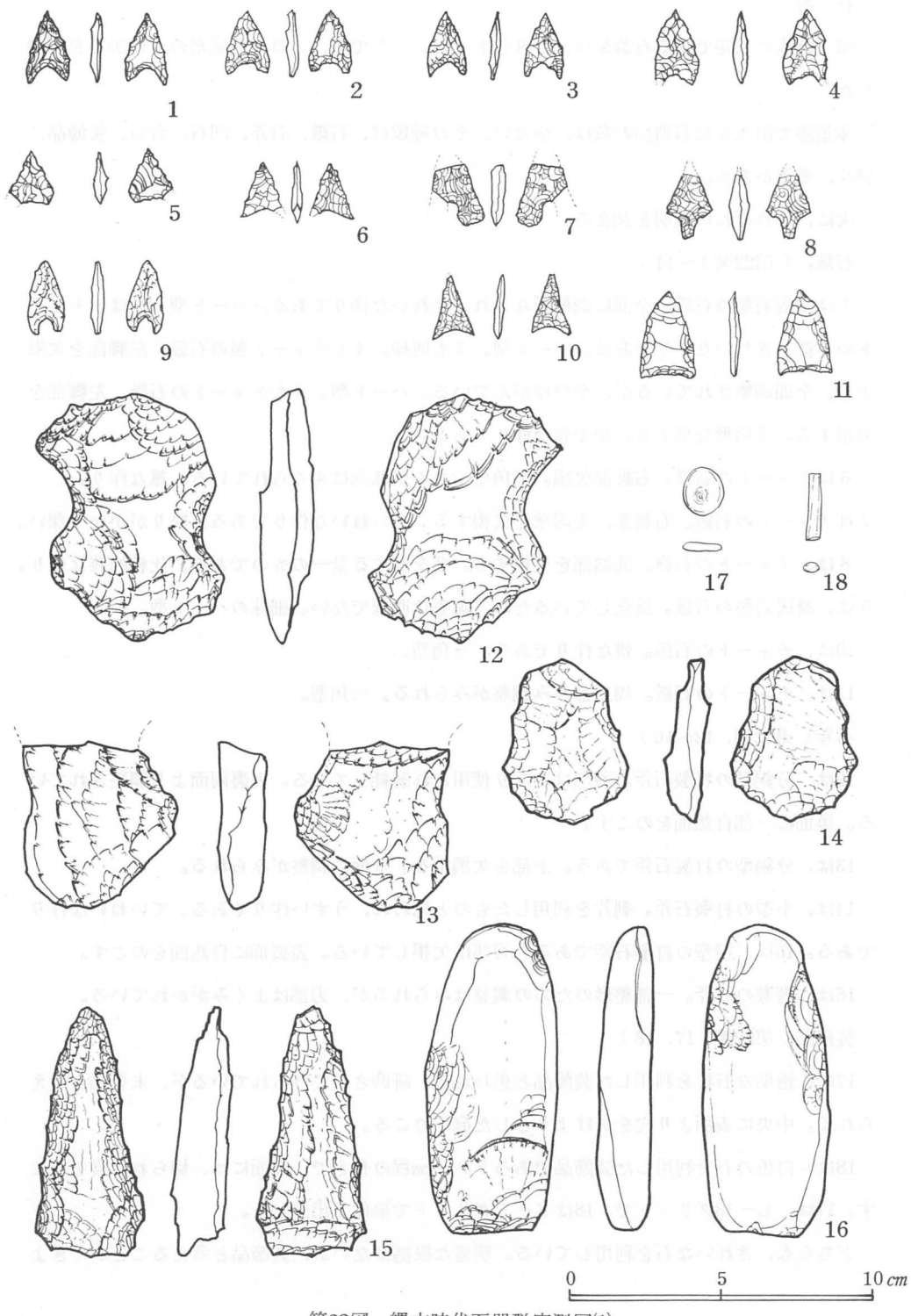
装飾品（第22図、17、18）

17は、透明な石材を利用した装飾品と思われる。研磨されて作られているが、未製品と考えられる。中央に表面より穴をあけようとした痕がのこる。

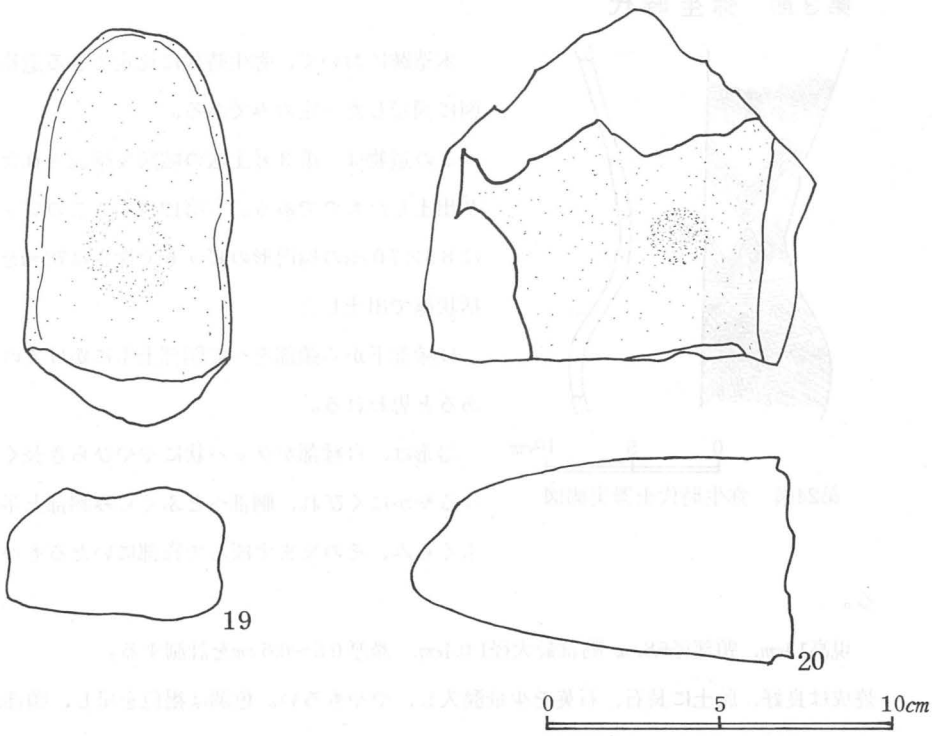
18は、白色の石を利用した装飾品であろう。２*cm*程の長さで、表面には、切られた痕をのこす。17は、Ｌ－13グリットで、18はＢ－５グリットで単体で出土した。

どちらも、きれいな石を利用している。明確な根拠はないが、装飾品と考えることができよう。

凹石（第23図、19）



第22図　縄文時代石器群実測図(1)



第23図　縄文時代石器群実測図(2)

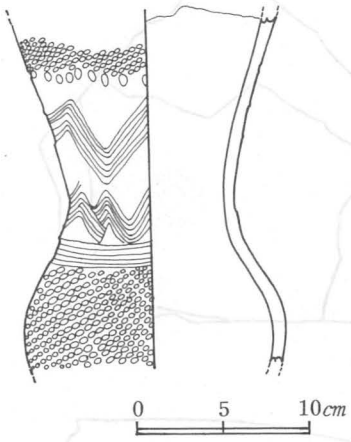
19は、砂岩製の凹石である。磨石の中央部に凹を作り出している。凹はあまり深くない。

台石（第23図　20）

20は、台石と考えられる。中央部に凹をもつ。

以上縄文時代の石器について説明した。

第３節　弥生時代



第24図　弥生時代土器実測図

本遺跡において、弥生時代に比定できる遺物は、第24図に図示した一定のみである。

この遺物は、第３号土坑の坑底で確認されたピットより出土したものである。（第12図）ここのピットの規模は８５×７０㎝の楕円形のピットで深さは78㎝を計る。一括状態で出土した。

口縁部下から頸部をへて胴部上半にかけての小型壺であると思われる。

器形は、口縁部がラッパ状にややひらき長く、頸部でゆるやかにくびれ、胴部へとふくらみ胴部上半で最大にふくらみ、そのまますぼんで底部にいたるものと思われる。

現高14㎝、頸部径6.8㎝、胴部最大径10.4㎝、器厚0.5～0.6㎝を計測する。

焼成は良好、胎土に長石、石英を少量混入し、ややもろい。色調は褐色を呈し、頸部が一部火熱を受け黒っぽくなっている。

文様は、口縁部下、及び、胴部は縄文を施こす。頸部には、７本単位のクシ状工具による山形文もしくは、波線文を２段描く。又その下に、６本の沈線を描き、縄文帯と区画している。

この遺物を出したピットは、単独で存在し、同様のものは、付近にも、調査区内でも確認できなかった。

本遺跡では、弥生時代の生活を示す遺物は、本個体しかなく、又、弥生時代の遺跡の少ない本市において、一つの手がかりがつかめたと思われる。

第７章　調査の成果と問題点

最後に、調査の成果と問題点を指摘してまとめにかえたい。

本遺跡の調査において確認された遺構は、古い順に先土器時代の遺物集中箇所６ヶ所、縄文時代の遺物集中箇所、及び文化層、弥生時代のピット（小土坑）１基、古代～中世に比定できよう溝状遺構（館址の環濠か？）１基、近世～近代の炭焼窯１基、時期不明の溝１基、土　4基と少ない。又、遺構の性格自体も不明なものばかりである。

ただ明確になったことは、先土器時代から、現在までこの地において、何らかの人々の生活痕が残されていたこととしかいいようがない。

たしかに、先土器時代の人々の生活用具や、縄文時代の生活用具の検出はできたわけではあるが、それがどのように、人々の生活をささえていたのかは、本遺跡では解明できなかった。

各時代毎に、確認されたことと、今後の調査の問題点を上げて行くならば、

先土器時代。

各集中箇所内での遺物の接合及び、個体別資料の選びだし。各集中箇所どおしの接合や分類。各遺物の産出場所等の分析等。

これらの調査や整理を通して各集中箇所の相互の関係がとらえられるものと思う。この段階であらためてユニットと呼びたい。

縄文時代。

この時期の文化層は、柱状図の中で設定するならば、Ⅱ層と考えられる。

館林地方では、火山からの距離がありすぎるためか、特有のからっ風で、土が運ばれさってしまうのか（土質にも影響される）表土が薄い。このため、遺物の層位的な把握は絶望に近い。

このようなこともあって、今回のように遺構が検出されない場合は、その形式にたよらざるを得ない。今回遺物の接合を行なってはみたものの、接合された遺物は少ない。

したがって、遺物の羅列のような形になってしまった。近県の資料をも含めて、もっともっと分析してみたい。

弥生時代。

本市における弥生時代の遺跡は、現在赤生田道満遺跡においてのみ確認されている。

本市は、低台地と湿地の入りくんだ地形であり、台地上では、弥生の確認はされていない。本遺跡では明らかに、その痕跡が確認されたわけであるから、今後、湿地帯にも目をむけて行きたい。しかしながら、流水している可能性は大きい。

古代～中世。

本遺跡のメインの遺構となった第１号溝址は、その規模、形態から考えて、環濠と考えても良いと思われる。

ただ全体の形状（調査区域外でどのように延びるか）が不明な点と、調査区域内で、この溝に伴うと思われる遺構が、検出されていないことで、決定的な根拠がない。

出土している遺物は、平安時代国分式の新しい時期に比定でき、検出された軽石（現在鑑定中）の時期が決定できれば、構築年代や、使用された時期をもっとしぼれると思う。

近世～近代。

この時期の遺構は、炭焼窯のみである。

本遺路のように、平坦な地域に炭焼窯が、検出されるのはめずらしい。

この炭焼窯が、何のために造られたのかその根拠はないが、一号溝址の存在が、構築に大きく作用している。

その他。

その他の遺構については明確に時期設定はできない。わずかに遺構の切り合等から考えると比較的新しいものとされよう。

本遺跡は前述の通り、城沼南岸の、城沼に突出した舌状台地の西斜面にあたる。

谷をへだてた南側には、縄文時代前期黒浜式に比定できる集落の存在が、一昨年度から調査された「大袋Ⅱ遺跡」で明らかにされている。

本遺跡では、同時期の土器片の散布はみられるもののそれに伴う遺構の検出はなかった。

遺物の分布状況では、調査区の南側より北側に集中する傾向を示す。このようなことから、本台地上において集落の中心は、本調査区より北、広い台地上に存在すると考えられる。

以上をまとめとしておきたい。

最後に、

人々が「生き」て行くうえで、自然環境とか、地理的環境とかいったものが大きく左右する。

気候は、「生き易さ」を造り上げるだろうし、地形は「生活の場」を制限していく。

このような中において、本地域には、一万年を越える昔から人々が住みついてきた。

本遺跡では、その一端を垣間見る資料を私達にのこしてくれた。それは断片的でありながらも……。

この城沼の南岸一帯には、縄文時代の前期、この地帯に住んでいた人々が行き来をしたことであろう。

どんなものを食べ、どんなものを着、どんな生活をしていたのであろうか。

それを解明していくには、今回の調査は、まだまだ微力である。

今後、少しでも多くの資料を探り出して行きたいと思う。

今回の調査では、残された問題がまだまだ多くあり、本報告書では、調査の事実を報告したにすぎない。もっと努力をして行きたいと思う。

多方面からの御指導、御教授をいただければ幸いである。

尚、報告書作成中に1号溝址検出の軽石が浅間C軽石と鑑定された。軽石の時代と出土遺物の時代を考えるならば大きな問題がのこってしまった。

再度検討をいただきたいと思う次第である。

参　考　文　献

「館林市誌」　歴史編、自然編　　館林市誌編集委員会　　昭和44年

「館林双書」１・２・３・４・６巻　　館林市立図書館

「群馬県遺跡台帳」Ⅰ・東毛編・館林市　　群馬県教育委員会　　昭和46年

「群馬のおいたちをたずねて」上・下　　木崎喜雄他著　　上毛新聞社

「群馬の地質をめぐって」・日曜の地学５　　野村哲編著　　築地書館　　昭和53年

「大地のあゆみ」群馬地質物語　　木崎喜雄監修　　上毛新聞社　　昭和57年

「日本先史土器の縄文」　　山内清男著　　昭和54年

館林市埋蔵文化財調査報告書第１集「大袋Ⅱ遺跡」（Ａ地点）発掘調査概報　　館林市教育委員会　　昭和56年

「大塚・間之原遺跡確認調査の概要」－第２次調査－　　太田市教育委員会　　昭和56年

富士見市文化財報告第14集「打越遺跡」　　富士見市教育委員会　　昭和53年

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書第２集「大袋Ⅱ遺跡」発掘調査報告書　　館林市教育委員会　　昭和57年

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書第３集「大原道東遺跡」発掘調査報告書　　館林市教育委員会　　昭和57年

「秩父薬師堂遺跡　'７９」発掘調査報告書　　両神村薬師堂遺跡発掘調査会　　昭和56年

写　真　図　版

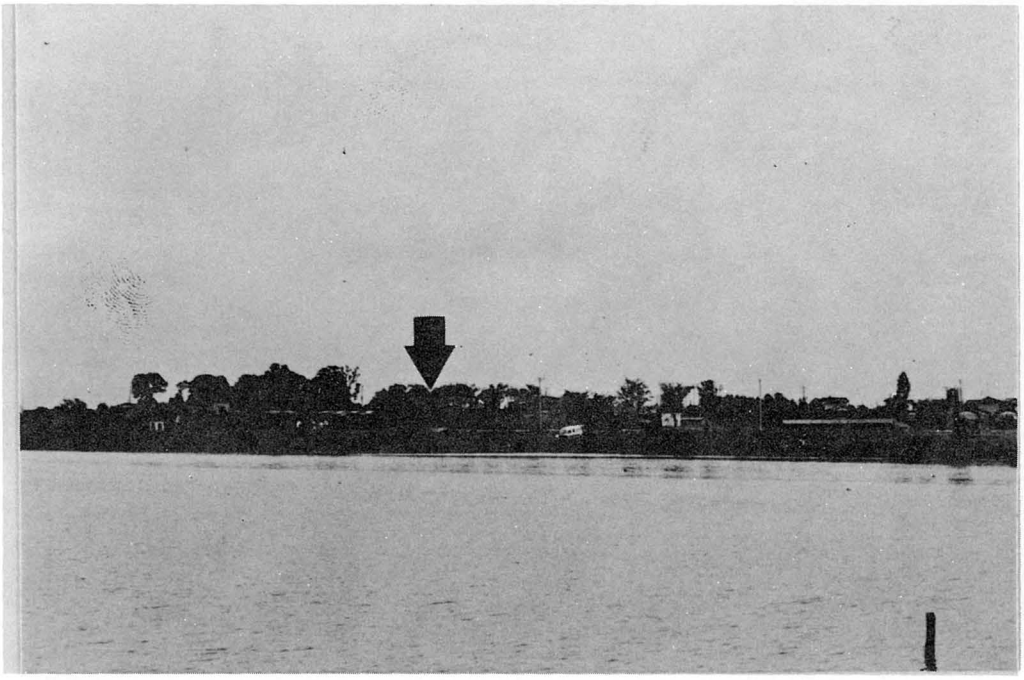


写真1. 遺 跡 遠 景

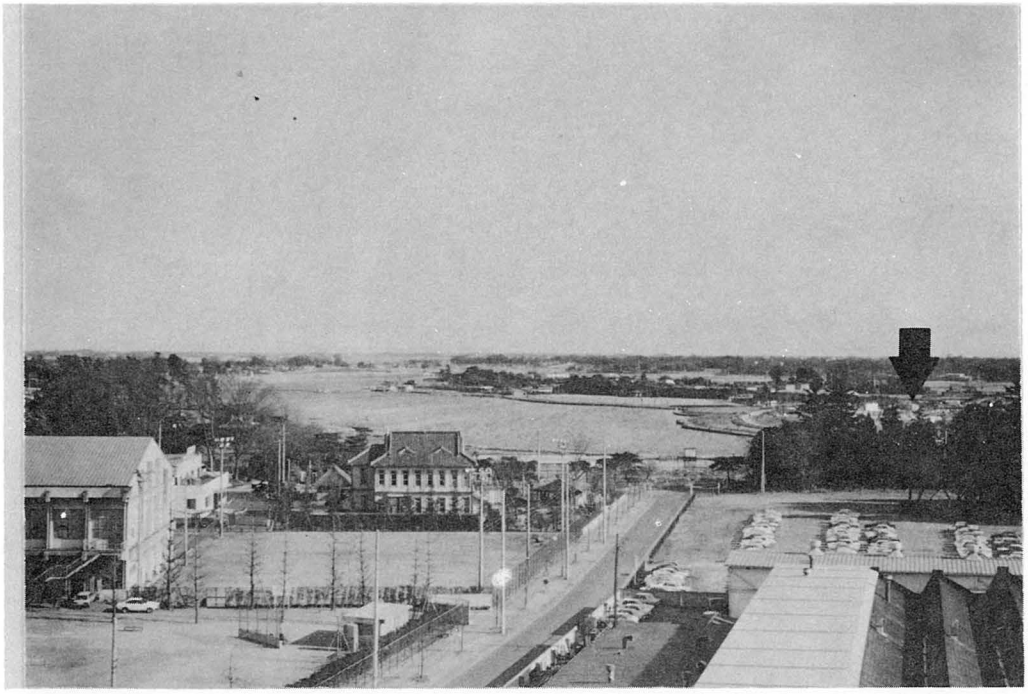


写真2. 遺 跡 近 景

写真3.　調　査　風　景

写真4.　調　査　風　景

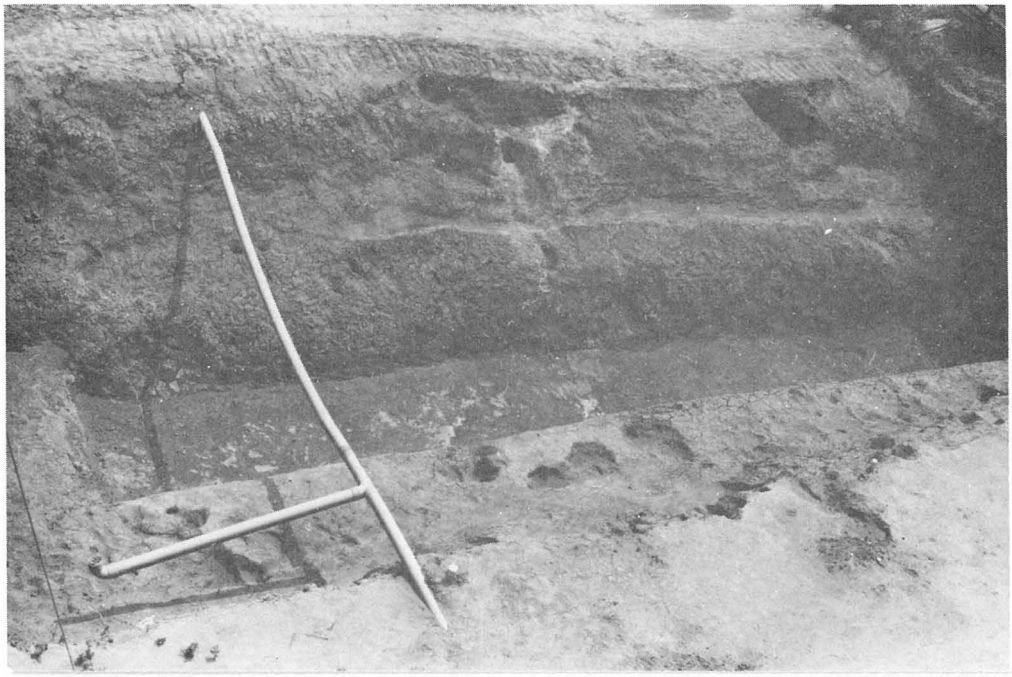


写真 5.　第一号溝址（東側）

写真 6.　第一号溝址（西側）

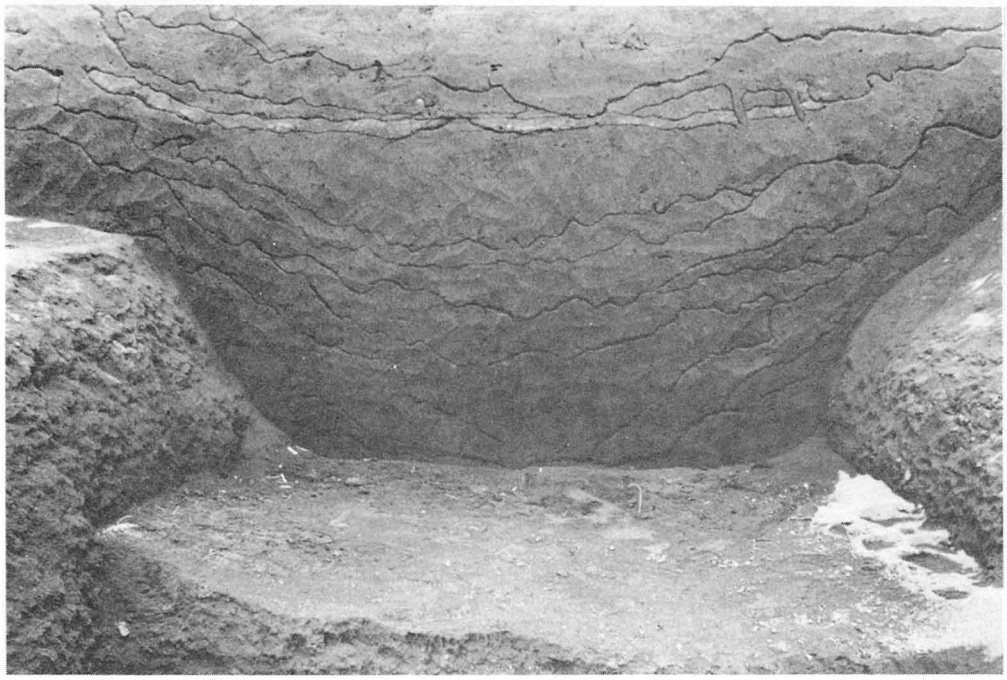


写真 7.　第一号溝址土層断面

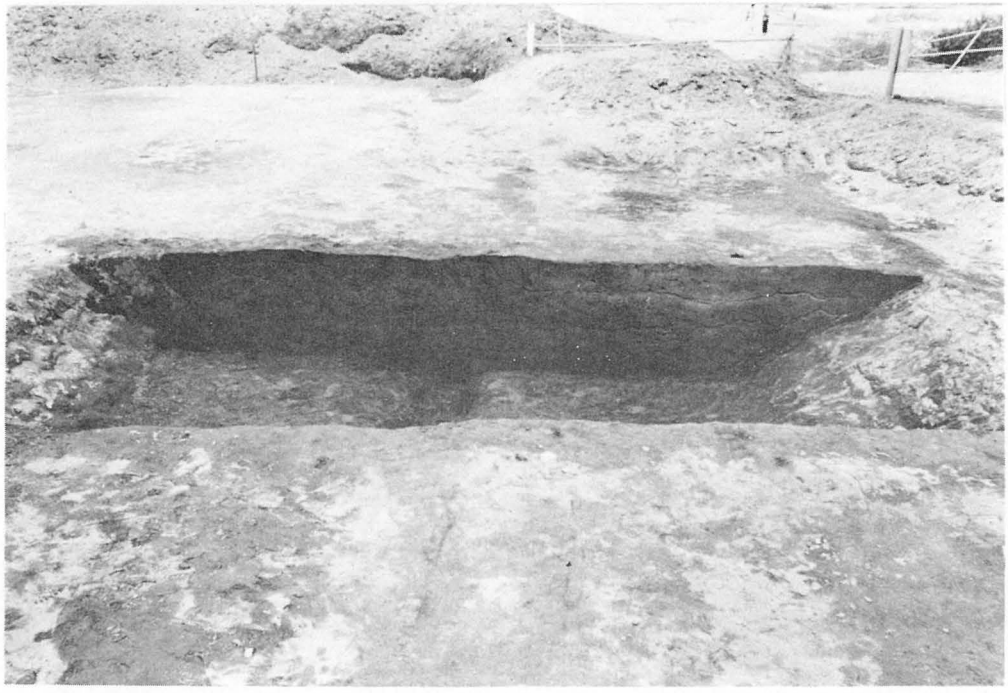


写真 8.　第一号溝址土層断面

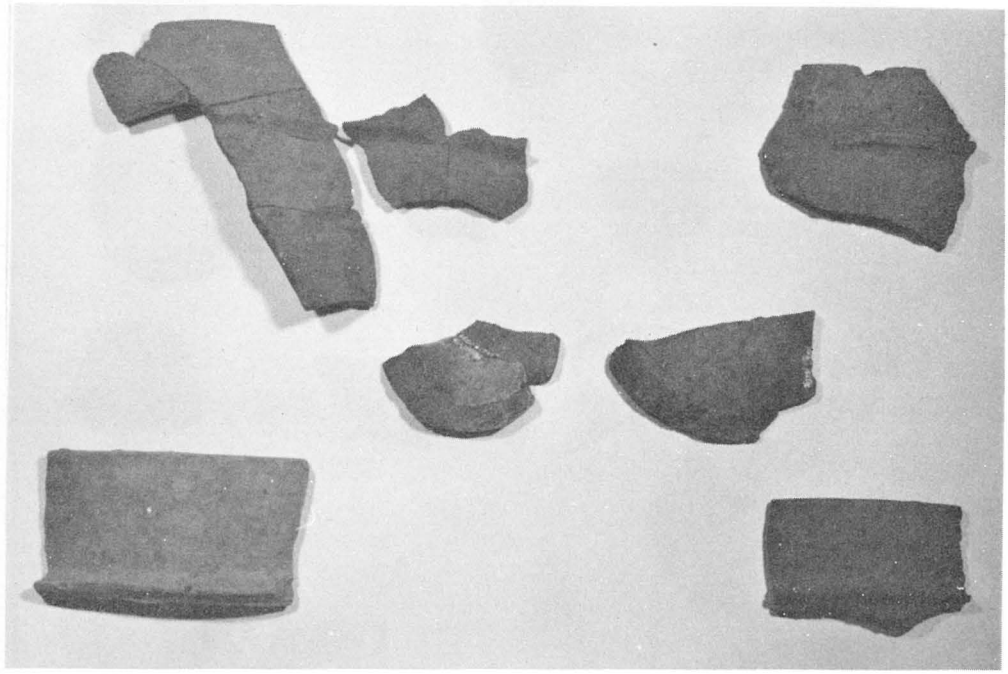


写真 9.　第一号溝址出土遺物

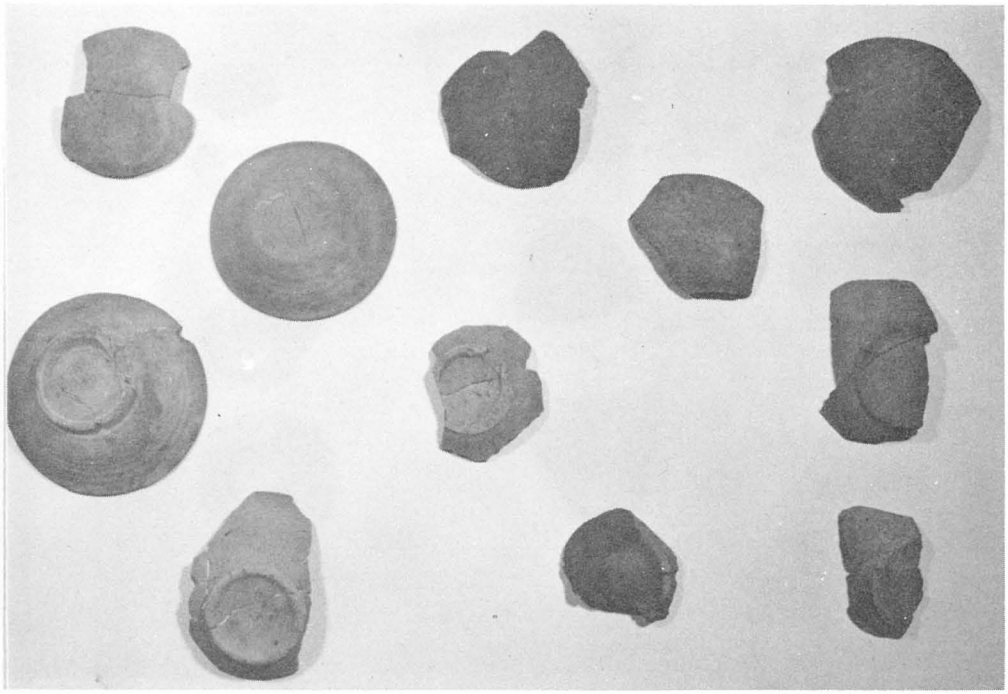


写真 10.　第一号溝址出土遺物

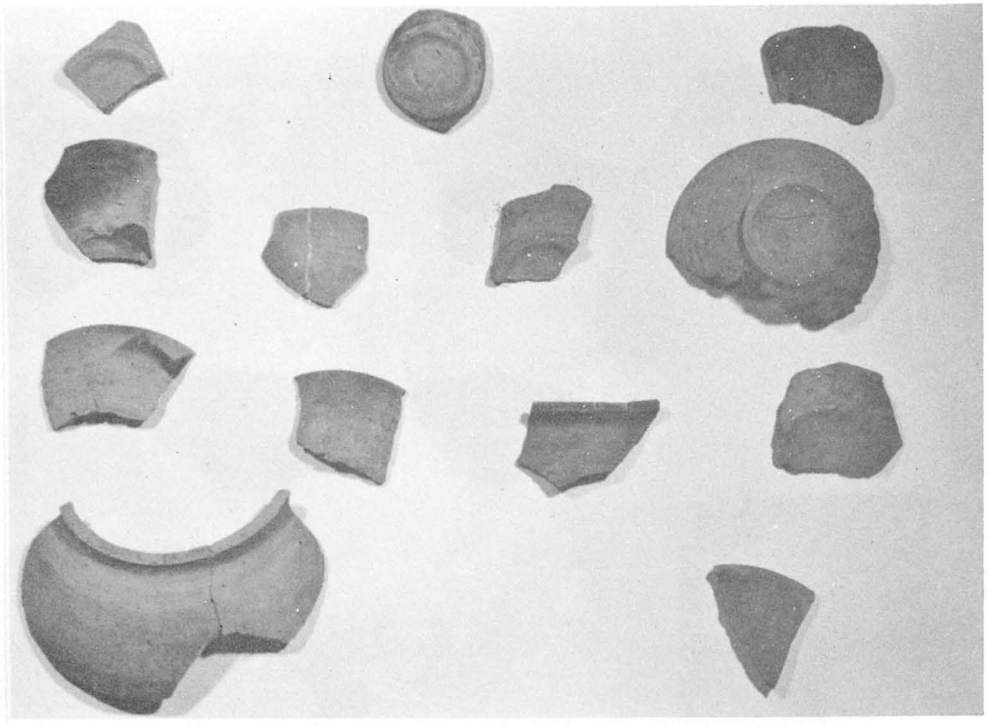


写真 11.　第一号溝址出土遺物

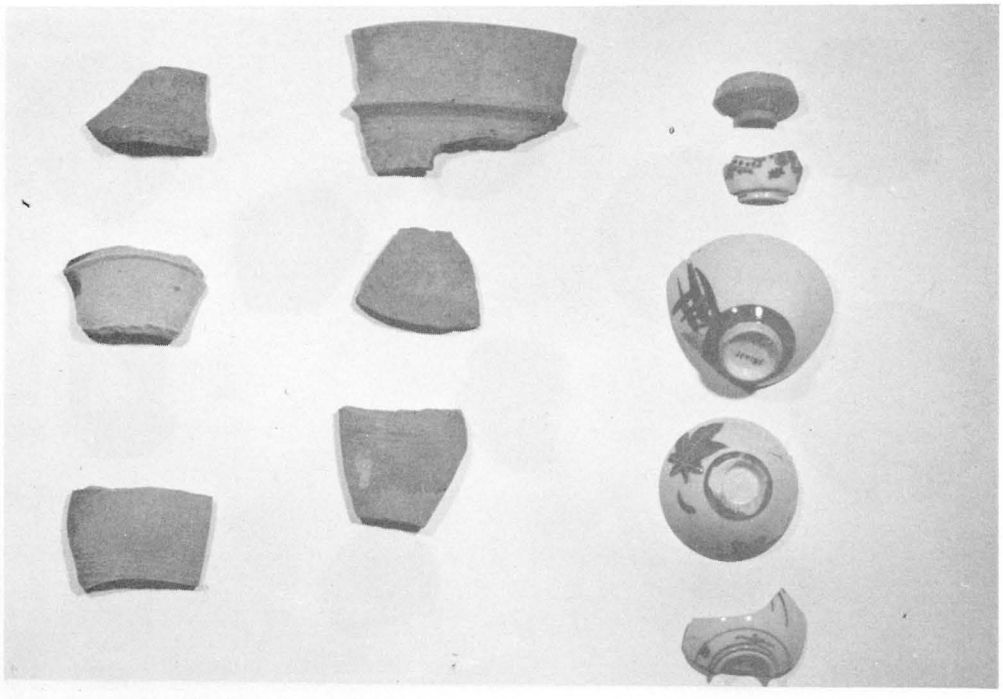


写真 12.　第一号溝址出土遺物

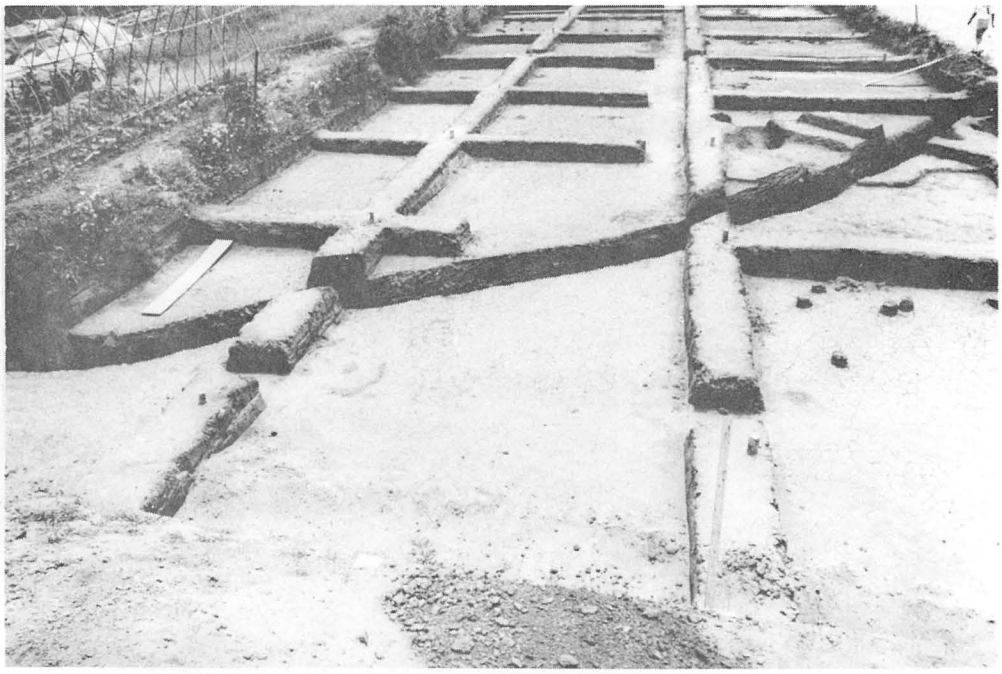


写真13. 第 二 号 溝 址

写真14. 第二号溝址土層断面

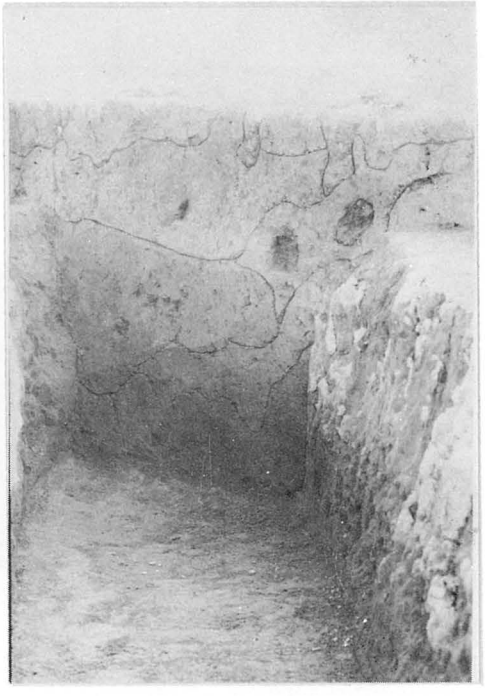


写真15. 第二号溝址土層断面

写真16.　炭　焼　窯　址

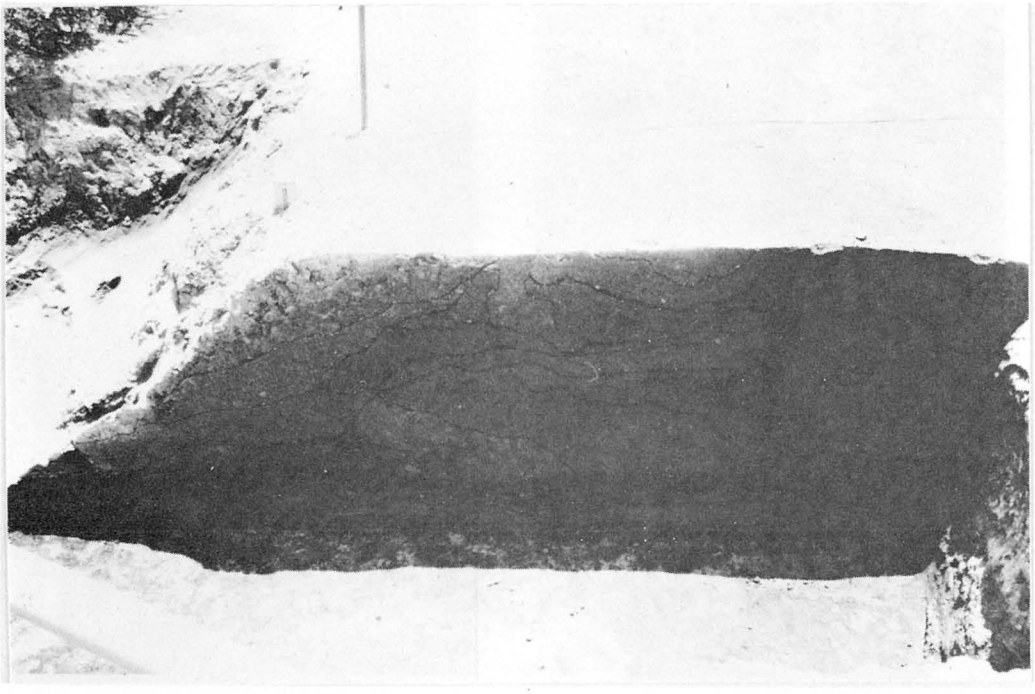


写真17.　炭焼窯址土層断面

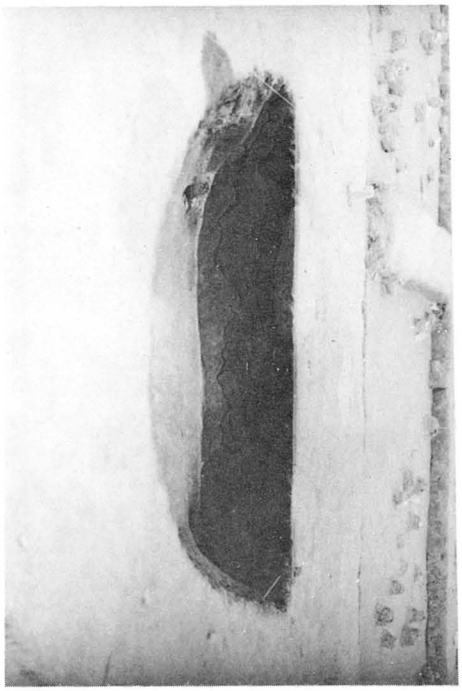


写真 18.　第一号土坑

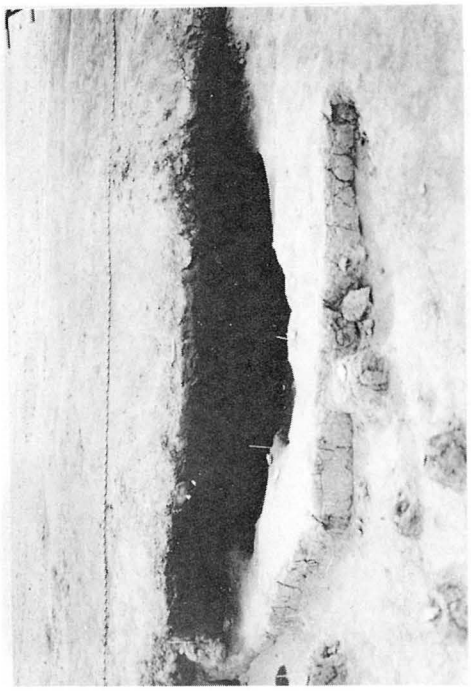


写真 19.　第二号土坑

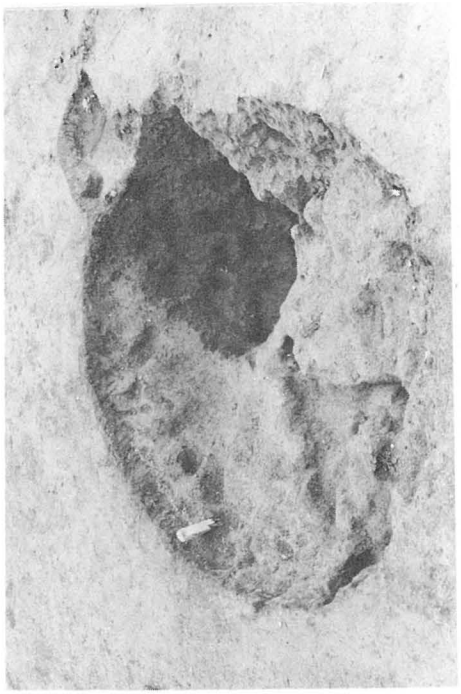


写真 20.　第三号土坑

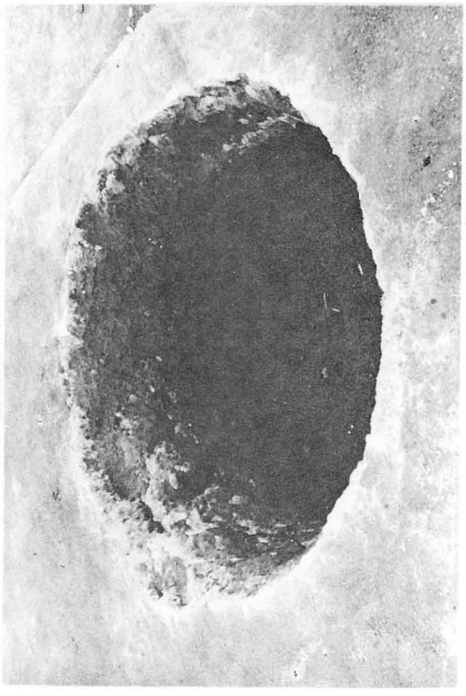


写真 21.　第四号土坑

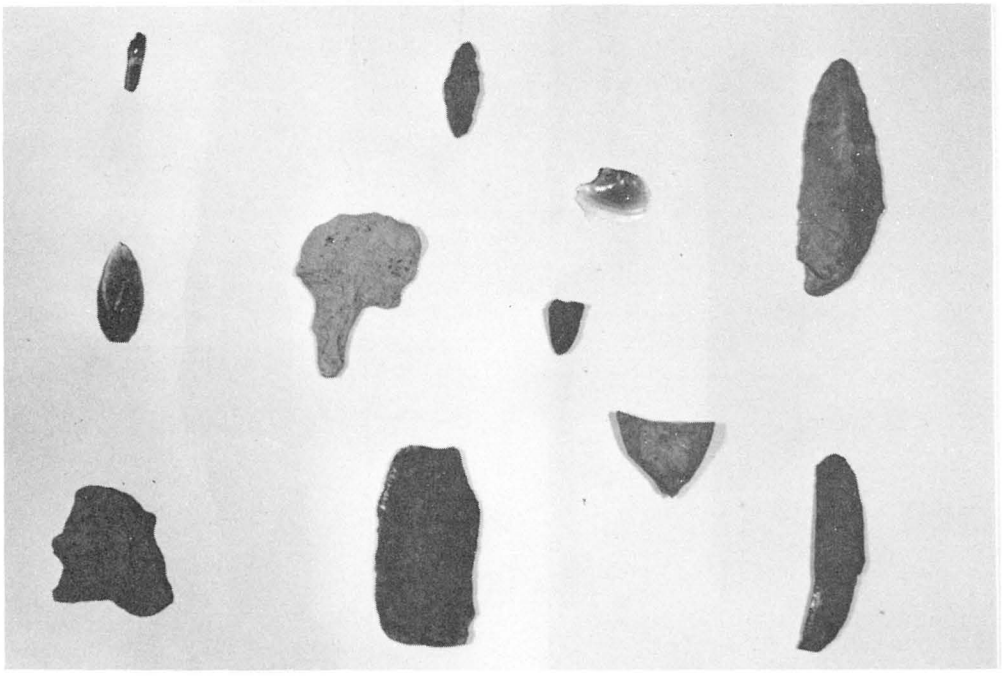


写真 22.　先土器時代石器群

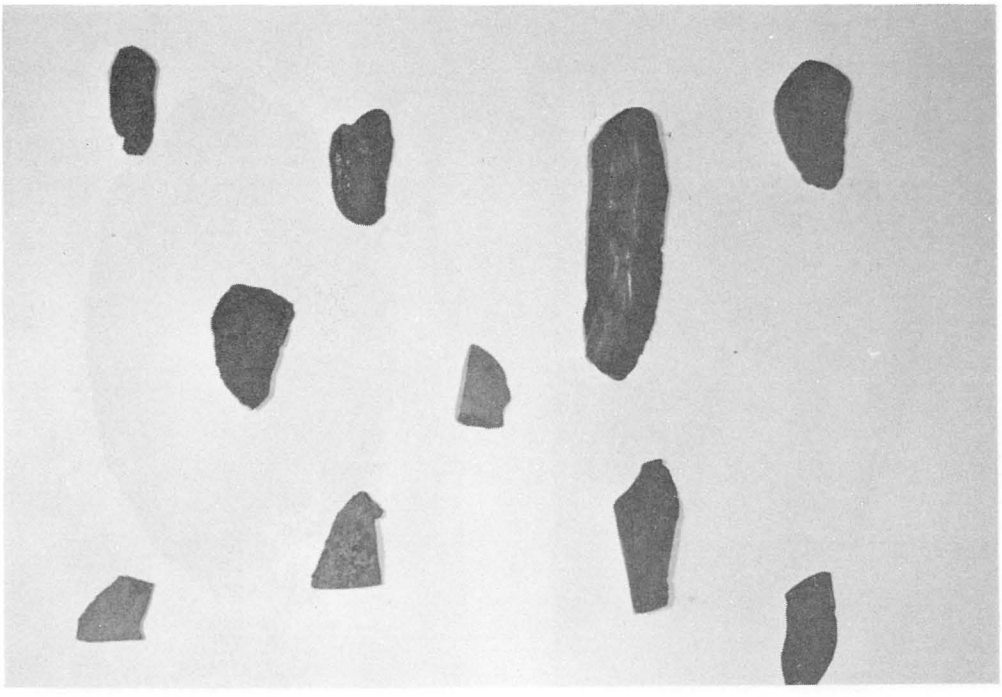


写真 23.　先土器時代石器群

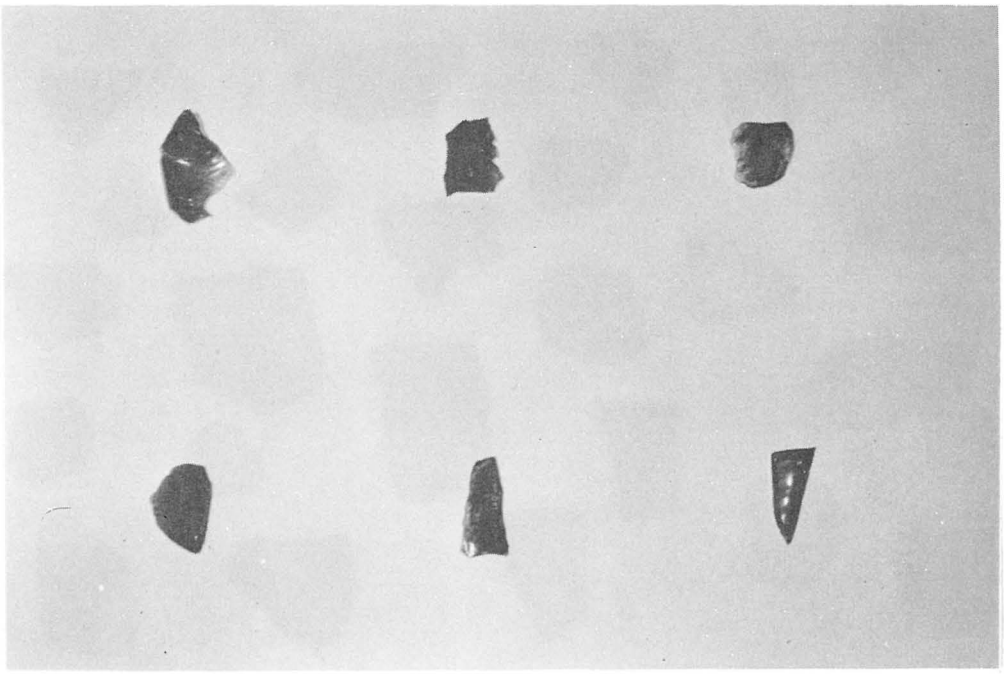


写真 24.　先土器時代石器群

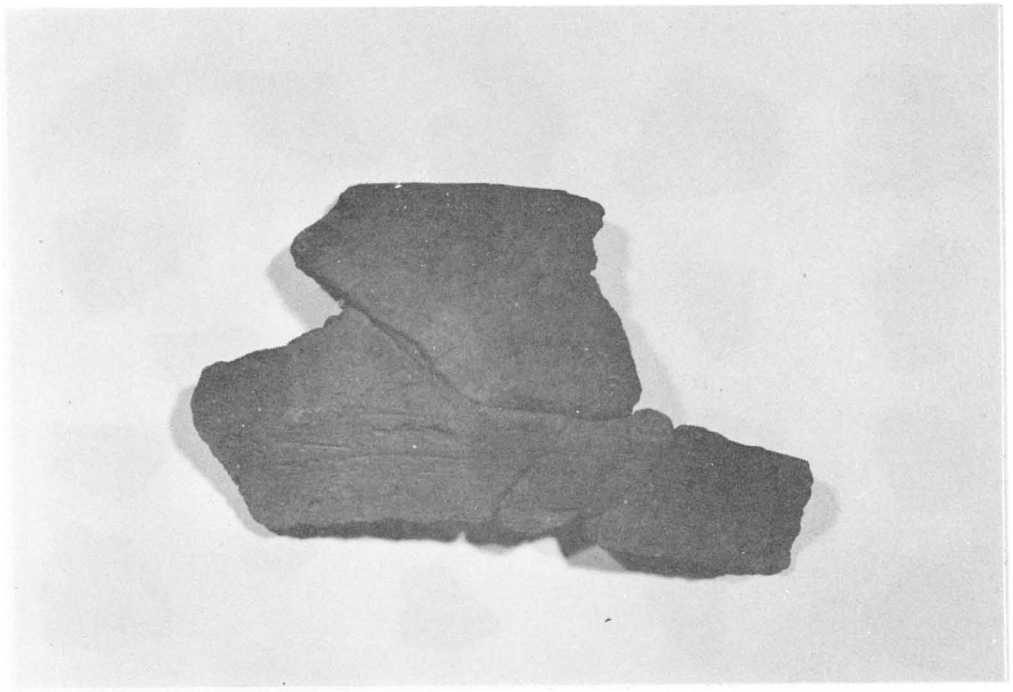


写真 25.　縄文時代土器群

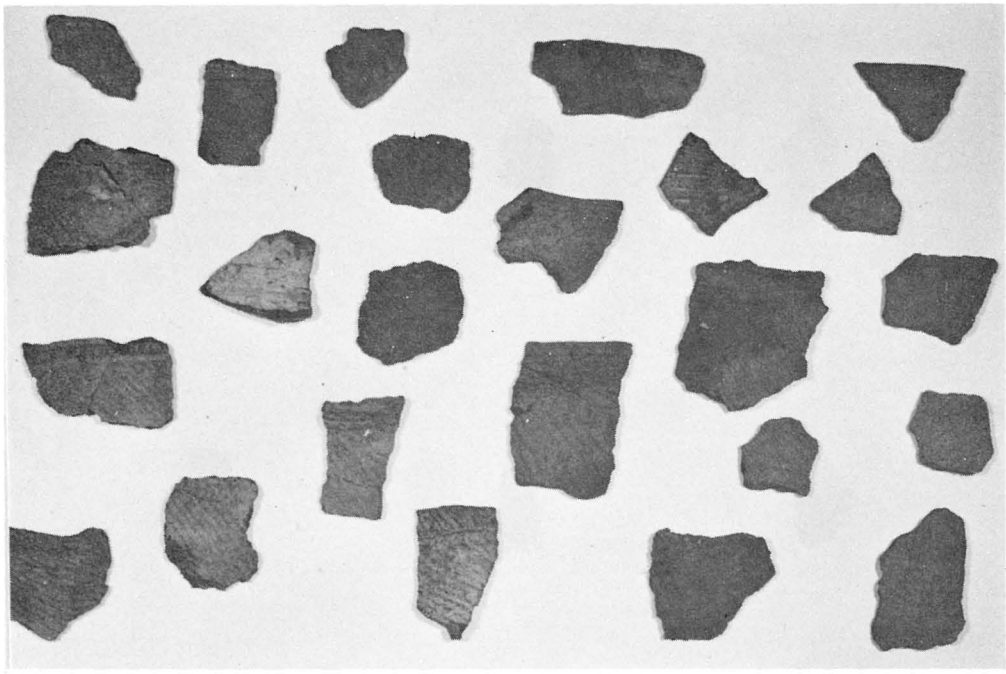


写真 26.　縄文時代土器群（拓影）

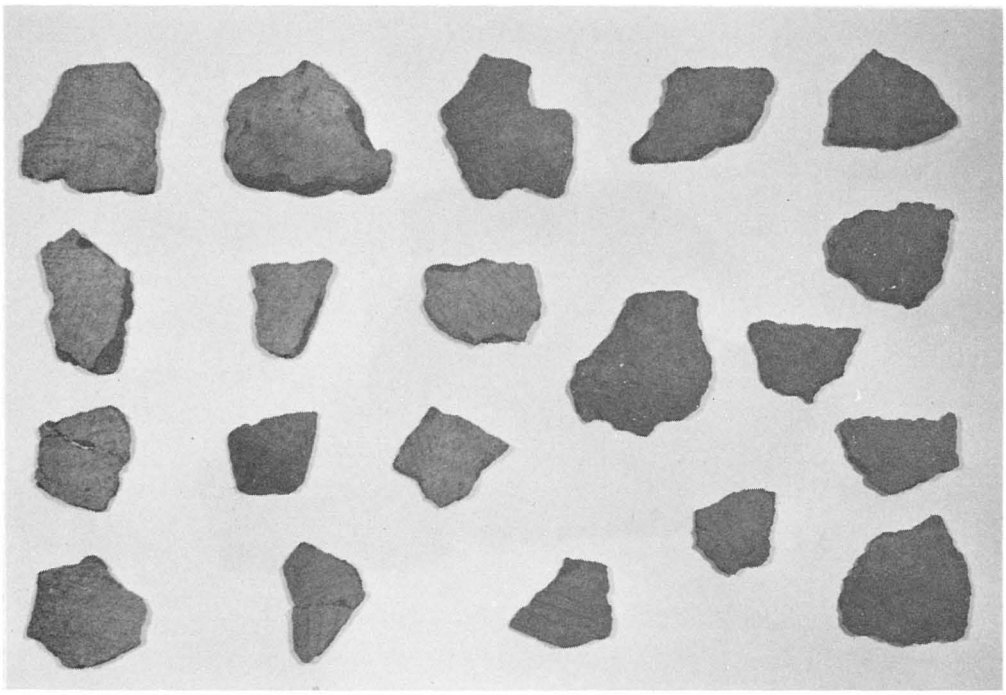


写真 27.　縄文時代土器群（拓影）

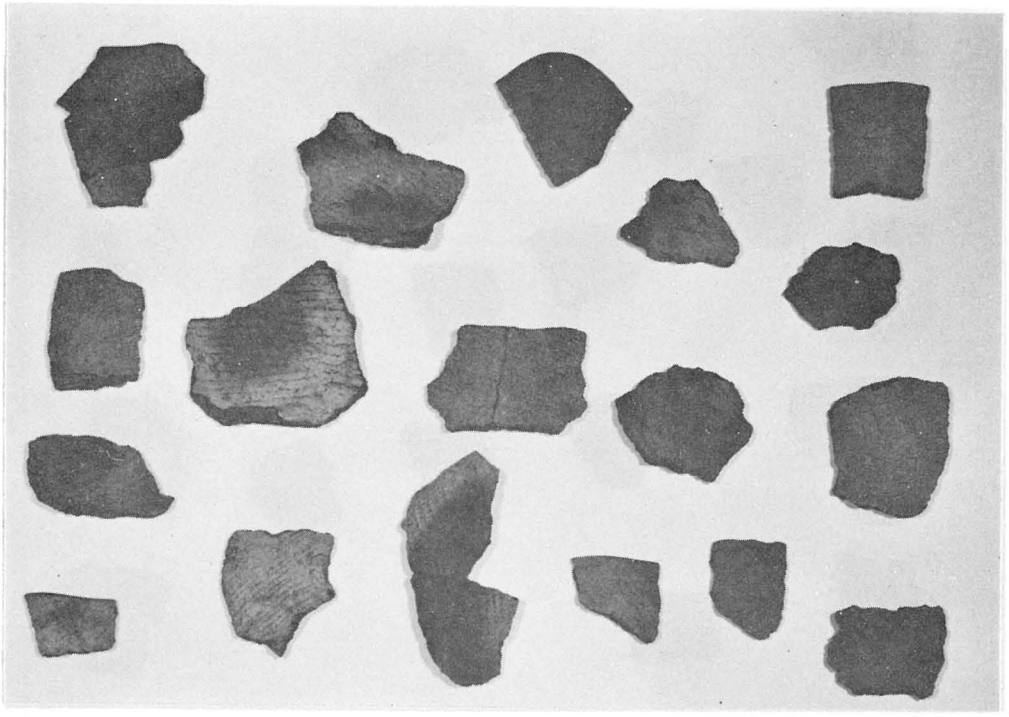


写真28.　縄文時代土悪群（拓影）

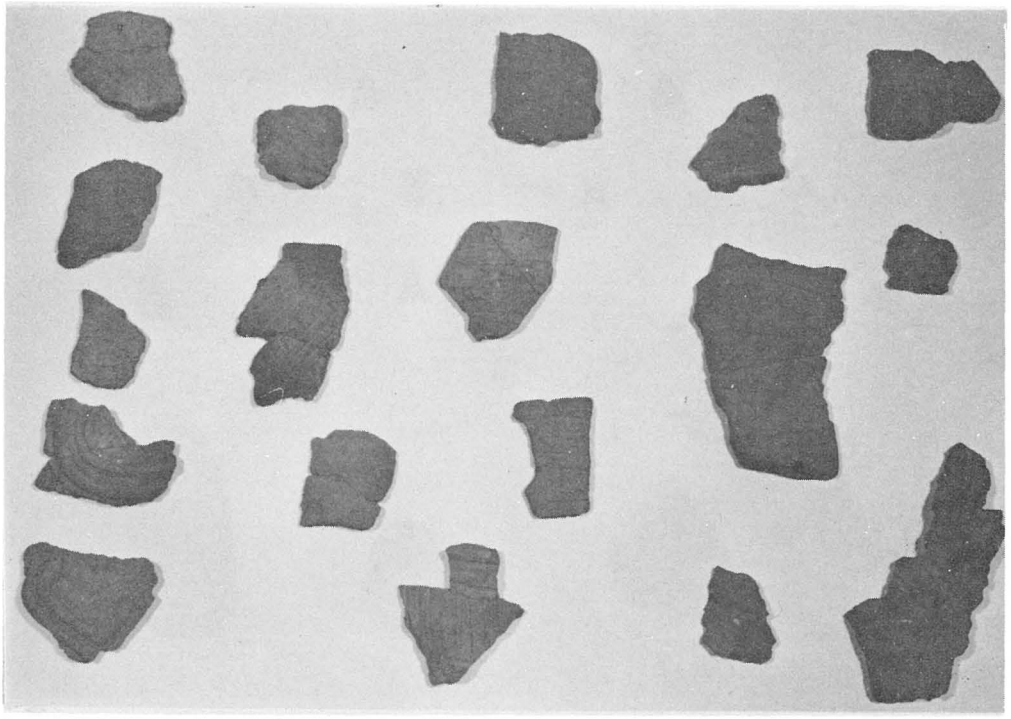


写真29.　縄文時代土器群（拓影）

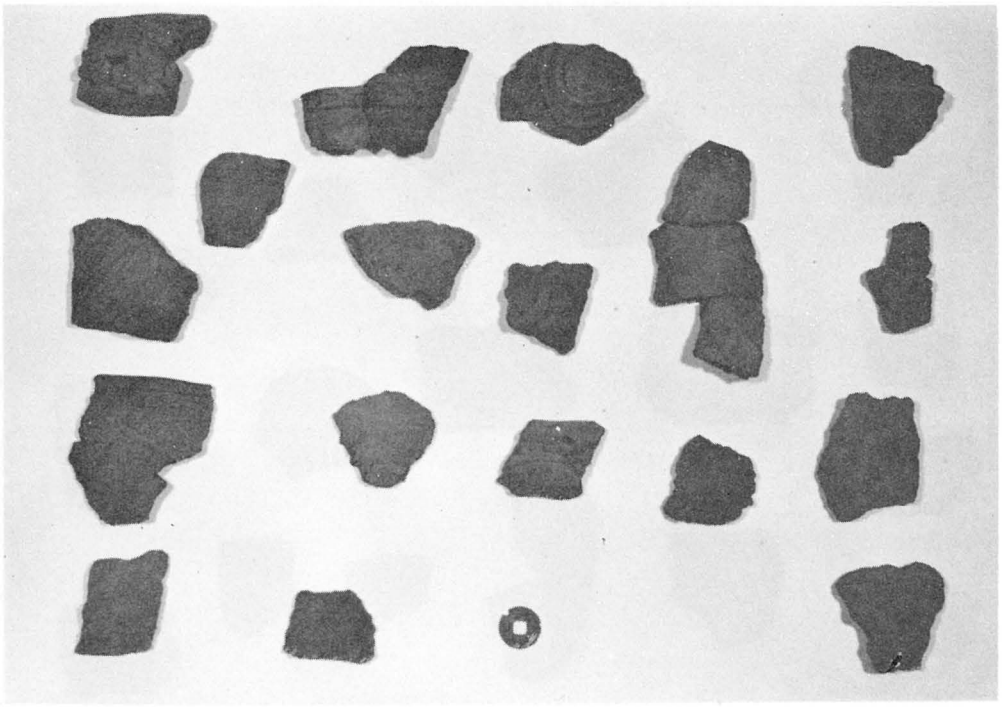


写真 30.　縄文時代土器群（拓影）

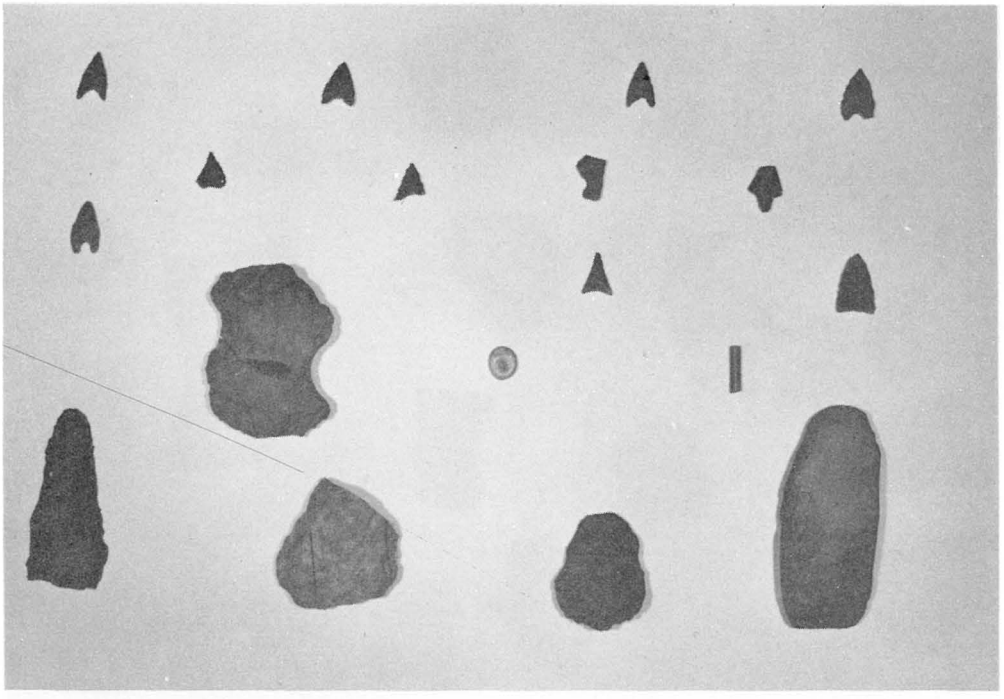


写真 31.　縄文時代石器群

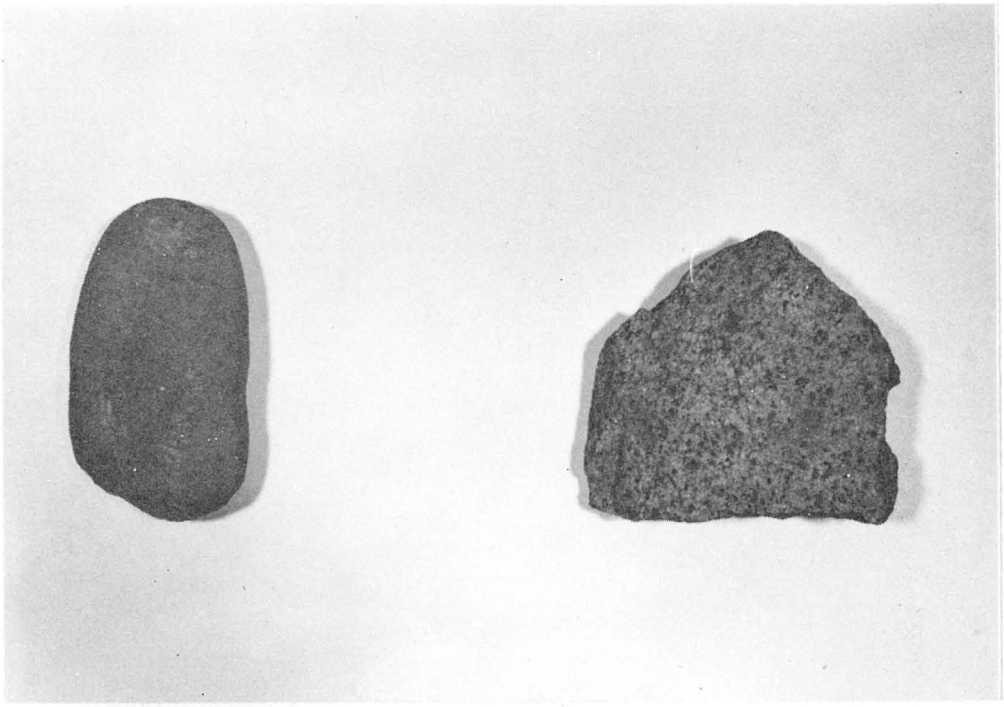


写真 32.　縄文時代石器群

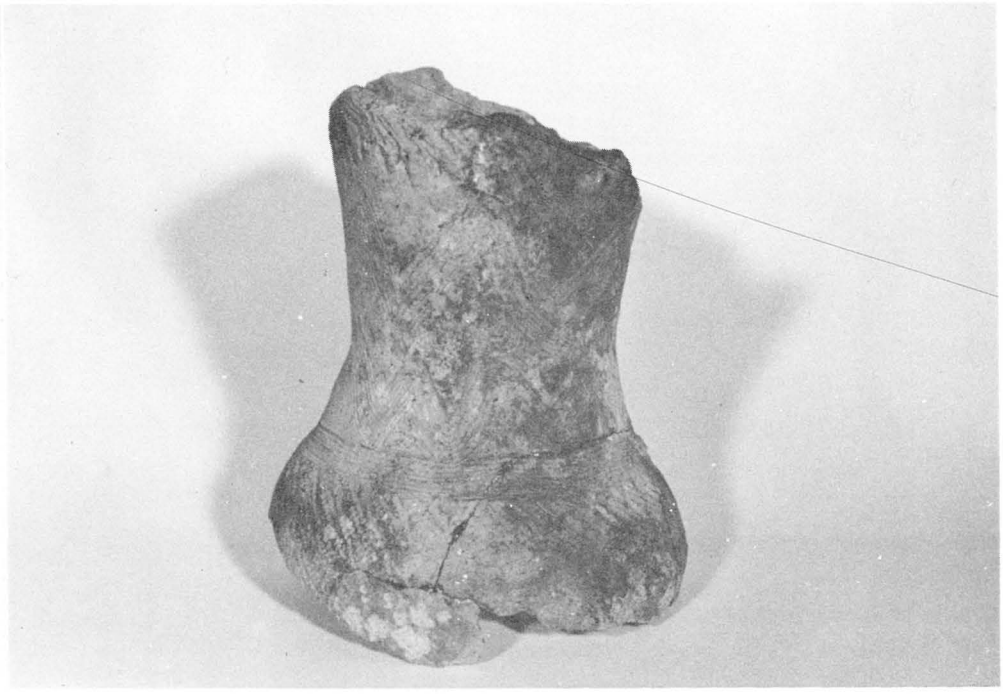


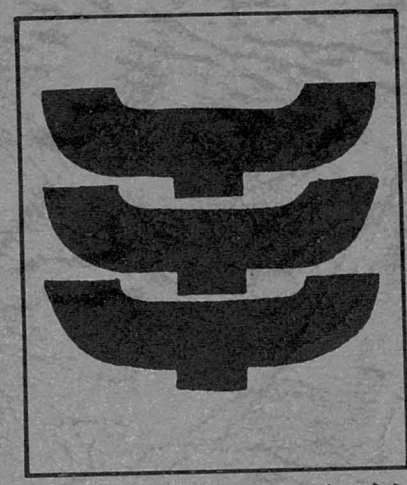
写真 33.　弥生時代土器群

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書　第4集
館林市大字羽附字大袋

大　袋　I　遺　跡

発　行　　館林市教育委員会　文化振興課
印　刷　　オーラ印刷有限会社

昭和57年6月30日　発行



〔ふる郷の文化と歴史をみなおそう〕